

武藤遊戯のデュエルロード

YASUT

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『戦いの儀』を乗り越え、仲間達と平和な日常を過ごす武藤遊戯。

ある日、海馬コーポレーションが開発した次元移動型デュエルデスクのベータテスターに指名される。



武藤遊戯（アテムではない）がデュエルする話が読みたかった a

nd 書きたかった。

目次

異次元への一歩	1
道場破り!? その名は「武藤遊戯」!	15
エンタメデュエリスト、榊遊矢	26
不動のデュエル、権現坂昇	46
融合使い、紫雲院素良!	70

異次元への一歩

『海馬コーポレーションの社長こと海馬瀬人と言えば?』

この問いには誰もがこう答えるだろう。

——『青眼ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンの白龍』、と。

この認識は全世界共通である。

理由は二つ。

一つ目は、他ならぬ海馬瀬人本人が『青眼ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンの白龍』を愛用していること。

そして二つ目は、海馬コーポレーションが運営している施設『海馬ランド』には必ず『青眼ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンの白龍』の像が建てられているからだ。

海馬ランドは古今東西のゲームが楽しめる施設だが、目玉はやはり『デュエルモンスターズ』だろう。

デュエルリングは大きく分けて二種類。デュエルディスクを必要としないテーブル型と、デュエルディスクを使用するフィールド型。そのどちらも人気があり、休日になれば老若男女を問わず誰もがここを訪れる。

今日もまたそうだ。

ずらりと並ぶデュエルリング……その中央。

誰もが注目するその場所で、二人の青年がデュエルを行っていた。

◆ 「行け、《ブラック・マジシャン・ガール》! 城之内くんはダイレクタアタック!」

青い魔術衣装の少女に攻撃命令を下す。

少女は視線を交わした後こくりと頷いて、愛用の杖を相手プレイヤー——『城之内克也』に向ける。

杖に魔力がチャージされ、赤い魔弾となって城之内くんに放たれた。

「ぐわあああああ——!!!」

城之内

LP:4000 ↓ LP:2000

魔弾はそのまま城之内くん^にに直撃し、遅れて絶叫が聞こえてきた。

「ボクはこれでターンエンド。さあ、城之内くん^ののターンだよ」

一頻り攻撃を終え、人の良さそうな笑みを浮かべながら終了を宣言する。

とはいつても、これは仮面だ。笑顔という仮面。戦略を隠すためのポーカーフェイス。

……尤も、付き合いの長い城之内くん相手には全く通じないだろうけど。

「くっそお、いい気になるなよ遊戯！ このターンで一気に逆転してやるぜ！」

「うん。ボクも楽しみだよ」

逆転してやる。そう宣言されて、思わず心が踊る。

——状況を確認。

遊戯

LP：4000

城之内

LP：2000

こちらのフィールドには魔術師の少女——《ブラック・マジシャン・ガール》が1体と、2本のランスをそれぞれ両手に持つ騎士——《暗黒騎士ガイアロード》が1体。伏せカード^{リバース}は一枚のみ。

対して城之内くん^の場にカードはない。

手札——遊戯、2。城之内、1。

——確認終了。

盤上は城之内くん^のの圧倒的劣勢。

けれど、今の彼に悲観はない。むしろここから這い上がるのだというアツアツの闘志が現れている。

「行くぜ！ 俺のターン、ドロー！」

ドローしたカードを確認した瞬間、城之内くん^のの顔が分かりやすくニヤけた。

「よし来た！ 魔法カード^{マジック}発動、《魔の試着部屋》！

ライフを800払い、デッキの上からカードを4枚めくる。その中

にレベル3以下の通常モンスターがあつた場合、可能な限り特殊召喚できる！」

「でも、ボクのフィールドには攻撃力2000以上のモンスターが2体いる。モンスターを2枚以上引き当てないと次のターン、ボクの攻撃は防げないよ」

「ああ！　つまり、こいつは確率50パーセントのギャンブルってことだろ？　だったら望むところだぜ！」

「うーん……そう、かなあ？」

肯定とも否定とも取れない微妙な反応。

彼の計算は穴だらけ……どころか穴しかない。しかし、彼の強運を考えればあながち間違いとは言い切れない……かもしれない。

城之内

LP：2000　↓　LP：1200

「そんじゃあ、カードを4枚めくるぜ！」

城之内くんはデッキの上からカードを4枚引き、それを公開する。

カードの色は——黄、緑、黄、黄。通常モンスターは3枚。

「よっしゃあ！　俺は《ランドスターの剣士》、《ランドスターの銃士》、《ランドスターの騎士》を、それぞれ守備表示で特殊召喚！」

妖精ランドスター。特徴は肌色のまるつとした独特の顔。

城之内くんは意気揚々と、それぞれ剣士・銃士・騎士の格好をした三体のランドスターを召喚した。

……相変わらずの強運に感心する。

デッキに入っているモンスターカードの割合を考えれば、3枚も引き当てるには相当の運が必要だ。

「流石は城之内くん。ここぞという時の勝負運は侮れないね」

「へっへーん。だがな、まだ俺のターンは終わっちゃいないぜ！」

俺は、場の三体のランドスターの力を使い！　《ギルフオード・ザ・ライトニング》を召喚！」

三体のランドスターが風に包まれ消滅し、新たに稲妻の騎士が召喚される。

銀の鎧と赤いマントを纏う筋肉質な男。その背には身の丈ほどの

大剣。

男は剣の柄を握り、こちらのフィールドを見据えた。

——バチバチ。

大剣を雷が迸る。

ひつ、と《ブラック・マジシャン・ガール》は身を引き、ガイアロードは攻撃に備え腰を落とした。

「《ギルフオード・ザ・ライトニング》の特殊効果発動！」

3体のモンスターを生贄にして召喚した時、相手モンスターを全て破壊する！

喰らえ、『ライトニング・サンダー』！」

「っ——！」

《ギルフオード・ザ・ライトニング》が大剣を引き抜き、振り下ろした瞬間、特大の雷が2体を襲った。

——防ぐ術はない。

自分を守る2体は雷撃を受け、硝子片のように消滅した。

「ようし！ 《ブラック・マジシャン・ガール》、《暗黒騎士ガイアロード》を撃破！」

そして遊戯、そのままお前にダイレクトアタックだ！

『ライトニング・クラッシュ・ソード』！」

攻撃命令を受け、稲妻の騎士は再度雷撃を放つ。

遊戯

LP：4000 ↓ LP：1200

「ぐっ……」

ライフが並ぶ。僅か一ターンの攻防で戦況が変わった。

——だからこそ、面白い。

攻撃を受けた箇所を抑えながら笑う。

——ダメージを受けた。それこそがセットカードの発動トリガー。デュエルディスクのボタンを押す。右手を掲げ、罾トラップを発動させる。

「伏せカードオープン！ 《ダーク・ホライズン》！」

ダメージを受けた時、デッキからその数値以下の攻撃力を持つ黒魔術師を呼ぶ！」

「黒魔術師!? まさか——!」

ぎっ、と城之内くんが後ずさりする。

召喚できるのは『攻撃力2800以下の黒魔術師』

となれば、召喚すべきはあのカードのみ——!

「そう! ボクが呼ぶのはこのカード!」

現れる、《ブラック・マジシャン》!

《ダーク・ホライズン》のカードが二つに裂け、一人一人通れるくらいの、異次元へ通じるゲートが開く。

——その中から、一人の黒魔術師が現れる。

漆黒の衣装。漆黒の杖。かの白き龍と同等の知名度を誇り、決闘者デュエリストなら知らない者はいないとされる一体。

そして、武藤遊戯のデッキのエースモンスターである。

……いや、正確には「だった」と言うべきか。

武藤遊戯の中にもう彼はいない。過去の王は既に冥界へ旅立った。

ここにいるのは、三千年の時を超えて下僕を受け継いだ、現在を生フアラオきる者。

——故に。《ブラック・マジシャン》は、武藤遊戯のエースでもある。

「城之内くん、今の攻撃は迂闊だったよ」

「くっ……だけど、《ブラック・マジシャン》の攻撃力は2500!

《ギルフォード・ザ・ライトニング》には敵わねえ! ターンエンドだ!」

強がりじみたま終了宣言。

それを聞いて、自分のターンを開始する。

「ボクのターン、ドロー!」

ドローしたカードを手札に加え、すぐさま別のカードを取る。

引いたカードがなんであろうと関係ない。

何故ならこの時点で——《ブラック・マジシャン》を召喚できた時点で、既にパターンに入っていたからだ。

「魔法カード、《師弟の絆》を発動! 自分の場に《ブラック・マジシャン》がいる時、手札・デッキ・墓地のいずれかから、黒魔術の弟子を召喚する!

来い、《ブラック・マジシャン・ガール》！」

自分フィールドに《ブラック・マジシャン・ガール》を呼び戻す。これで揃った。師匠と弟子、黒魔術を使いこなす魔術の徒。使い手次第ではあらゆる状況を打破できる組み合わせだ。

「この状況で《ブラック・マジシャン・ガール》……？ 何をやる気だ、遊戯」

城之内くんは訝しげに眉を潜める。

《ギルフォード・ザ・ライトニング》の攻撃力は2800。確かに攻撃力という面なら《ブラック・マジシャン・ガール》では敵わない。

だが——それ以外なら話は変わる。

黒魔術の弟子。彼女が誇る潜在能力は《ブラック・マジシャン》にも劣らない。

「答えはこれだよ！」

魔法カード発動、《黒・魔・導・爆・裂・破》！

自分の場に《ブラック・マジシャン・ガール》が存在する時、相手フィールドの表側表示モンスターを全て破壊する！」

「なあにい!？」

少女はキツと稲妻の騎士を睨む。

——大気が震え始め、杖の先端に魔力が集う。バチバチとスパークが発生し、赤い球体が出現した。

攻撃力の数値に見合わない高純度の魔力。それは、あらゆる魔物を滅殺する黒魔術である。

少女は気合の一声と共に大きく跳躍し、先ほどのお返しと言わんばかりに赤い魔弾をぶっ放した。

「ぐはーっ!!」

そうして、唯一の壁である《ギルフォード・ザ・ライトニング》は消滅した。

残っているのは、中途半端なライフの城之内くんのみ。

「行け、《ブラック・マジシャン》！ 城之内くんにダイレクトアタック！」

——『黒・魔・導』！

止めの攻撃命令。

黒魔術師は杖を振りかぶり、黒い魔導弾をプレイヤー目掛けて発射した。

赤に続けて黒。二度目の魔法攻撃が城之内くんを襲う。

「ぐわああああああ——!!!」

城之内

LP：1200 ↓ LP：0

またもや直撃、そして決着。

——とある休日の決闘は、武藤遊戯の勝利で幕を閉じた。



海馬ランドは最近建てられた施設なのだが、休日は驚く程盛況だった。

特にこのデュエルリングは大入り満員で、一回デュエルが終わったらすぐ退かなければならないほどだ。

「おい、早くしろ！ 後がつつかえてんだ！」

「あ、はい。城之内くん、行くよ」

バトルシテイ優勝者「武藤遊戯」の名前は、ここでは殆ど意味を成さない。

立派な肩書きを持っていても、所詮は単なるお客さんなのだ。

そんなわけでそそくさと、半ば追い出される形でデュエルリングを後にして、観客席へ移動する。

つい先程まで《ブラック・マジシャン》がいたそのリングでは、5分も経たない内に次のデュエルがスタートしていた。

「ほっほっほ、流石はワシの孫じゃ！」

それにしても城之内よ、お前さんは相変わらず進歩がないのう！」

観客席に戻ってきて、爺ちゃん——「武藤双六」が上機嫌に笑いなから城之内くんの背中をバツシバシと叩く。

とつくに還暦を迎えているのにこの元気、我が祖父ながら流石というほかない。

「いってーなじーさん！ 俺だつて着々と進歩してらあ！」

なあ遊戯、そうだよな!？」

「うーん……そうだね、今回は少し危なかったよ」
「だろ!？」

へん、聞いたかじーさん。俺だって伊達に遊戯とデュエルしてるわけじゃねえ。経験を重ねるごとに、一歩ずつ強くなってるのさー!」

「むう……」

ぐぬぬと押し黙る爺ちゃん、得意げになる城之内くん。

天狗になるのはいけないと思うので、今のうちに釘を刺しておこう。

「でも、やっぱり城之内くんは詰めが甘いよ。最後の《ギルフォード・ザ・ライトニング》の攻撃は、もう少し考えるべきだったんじゃないかな?」

「んなことねーって。あれは単に運が悪かっただけだ」

「ううん、他にもやり方はあつたはずだよ。《ギルフォード・ザ・ライトニング》は3体を生け贄にした時に効果を発動できるけど、敢えて2体のみを生け贄にする手もあった。

あの時ボクのフィールドにいたのは、攻撃力2000の《ブラック・マジシャン・ガール》と、2300の《暗黒騎士ガイアロード》。効果を使わず攻めていれば、まだ勝敗は分からなかったはずだよ」

「うーん、そーかなあ……いやまあ、確かにそうだけだよー……」

城之内くんは腕を組み不満そうにこちらを見ている。どうやらまだ納得できていないらしい。

「つまり、城之内には警戒心が足りんというわけじゃない。これを克服できんようでは、いつまで経ってもプロにはなれんぞい!」

「ぐはー!」

胸を突くその一言に、城之内くんは大げさによるめいた。

——そう、プロ。城之内克也は、プロデュエリストを目指している。それはつまり目標……進路が決まっているということだ。城之内くんは未来を見据えて、少しずつ前へ進んでいる。

では、自分は?

武藤遊戯は、どうだろうか……?

「くっ……じーさん、痛てえトコロを突きやがって」

「ぬはははは！ 悔しかったら遊戯から一本取ってみることじゃない！」

「上等だぜ！ 今は無理でも、いつか遊戯に勝ってみせるぜ！ 覚悟しろよ遊戯！ ……遊戯？」

「……………」

名前を呼ばれ、現実に戻る。

「…………ごめん、何？」

「だから、いつか遊戯に勝ってやるって話。プロの世界はよくわかんねーけど、遊戯レベルのヤツがうじゃうじゃいやがるんだろ？」

「だったら、遊戯と肩を並べられるくらいには強くならねーとな！」

「…………そうだね。城之内くんなら、きっとプロになれるよ」

「おう！ ありがとよ、遊戯！」

親指を立てて、城之内くんは気持ちよさそうに笑う。

実際、彼ならプロになるのも夢ではない。未だに運に頼っていると
ころもあるが、実力は間違いなく伸びている。加えて、デビューリスト・キングダム「決闘者の王国」、バトル・シテイでの成績。あとはスポンサーさえついてくれれば、彼は徐々に開花していくだろう。

「そういうえば遊戯。お前さんはどうするんじゃ？」

「え？」

…………思わぬ角度からの追求に、つい間抜けな声が出た。

爺ちゃんは何食わぬ顔でこちらの顔を窺っている。

けれど、それは間違い。何食わぬ顔、というのは見かけだけの仮面だ。

心配しているのだ。一人の祖父として孫の行く末を。

「どうって、何が？」

「じゃから、プロじゃよプロ。遊戯がその気なら、今すぐにでもプロになれるじゃろ？ 城之内はともかくな」

「んだとう！ おいじーさん、それどーゆー意味だ！」

「いいから黙つとれ城之内。それで、どうなんじゃ遊戯」

爺ちゃんに諭され、城之内くんもまたこちらを見る。

…………本当のことを言うと、爺ちゃんの言う通りなのだ。

高校卒業後という条件付きだが、様々なところからプロ入りのオファーが来ている。

ゲームデザイナーであるペガサスに勝利し、バトルシティでも優勝を修めた決闘者^{デュエリスト}、武藤遊戯。その知名度は、時々自分でも恐ろしくなるくらいだ。

——でも。

ボクは、それが嫌だった。

「今のところ、そういうつもりはないかな。」

「なんというか……今のボクがプロになるのは、何か違う気がする」
そう、違うのだ。

プロ入りのオファーはありがたいと思う。しかしそれを受けるのは武藤遊戯ではなく、**彼**であるべきだ。

「……うん。やっぱりできない。」

ボクはデュエルが好きだ。だからこそ、彼の偉業を奪ってまでプロになるのは嫌なんだ」

彼。

それだけで、二人には伝わる。

「ふむ……そうじゃな。それでこそワシの孫じゃ。」

いくら姿が似ていてもお前さんとあれは別人じゃ。遊戯よ、お前は
お前の人生を歩めばいいんじゃない」

「けどよ、だったら遊戯はどうすんだよ。その理屈だと、遊戯が遊戯で
ある限りプロにはなれねーんじゃないか？」

「うーん……」

城之内くんの指摘に閉口する。

そう。『武藤遊戯』としての経歴に拘る限り、ボクはプロになれないのだ。

それ自体に思うことはない。城之内くんのような野心はないし、プロ
口に対する特別な憧れもないのだから。

かといって、他に目指したいものもない。いっそデュエルのことは
すっぱり忘れて大学を目指すのも一つの生き方だ。

「——だったら、こいつを受けてみたらどーだ？」

と。

城之内くんでも爺ちゃんでもない第三者が、一枚のチラシを片手に現れた。

青みがかった髪と吊り上がった目元。身長は自分より少し低いくらい。上物のスーツを着込んでいるせいか、実年齢より大人っぽく見える。

「モクバくん?」

「よ。久しぶりだなー、遊戯」

——「海馬モクバ」。海馬瀬人の弟にして、海馬コーポレーションの副社長である。

モクバくんからチラシを受け取り、爺ちゃんと眺める。

城之内くんはというと……モクバくんをからかっていた。

「モクバ? お前なんでここにいるんだ?」

「ただの見回り。見ての通りウチは盛況だからな。マナー違反してるヤツがいらないかパトロールしてるんだよ」

「ホントかあ? モクバって確か小学生だったよな? 難しいことはまだできねーから、とりあえずパトロールさせてるだけじゃねーのか?」

「っ——うるさい!!」

ガスツ。

モクバくん渾身の蹴りが城之内くんの脛に炸裂した。

「ぐっ——うおおおお……!」

城之内くんは苦悶の表情を浮かべて蹲うずくまった……が、自業自得なので視界の隅に追いやる。

改めて渡された紙を見る。

ざっと目を通すと、海馬ランド主催のイベントのチラシのようだった。

内容は……

「新型デュエルディスクのベータテスト?」

「なにい!？」

変な声で唸っていたはずの城之内くんは、脛に受けたダメージから

一瞬で回復しチラシを覗いてきた。

……彼が喧嘩に強い理由が分かった気がする。

渡されたチラシの内容は、新型デュエルディスクのベータテスターを一人だけ募集する、というものだった。

童実野町内でこのチラシは見たことがない。おそらく、公式にはまだ配布されていない物なのだろう。

選ばれる条件は二つ。一つ目は決闘者デュエリストであること。二つ目は何かしらの大会で受賞経験があること、らしい。

この二つを確認した城之内くんは、食い入るようにアピールし始めた。

「おいモクバ！ これ、俺でもいいんだよな！」

「いいと思うけど……多分無理だよ。その企画の責任者、兄サマだから」

「そんなことねーだろ！ 俺だってそれなりに腕の立つ決闘者デュエリストだ！ 受賞経験もある！ 条件はバッチリクリアしてるぜ！」

「そうじゃなくて、兄サマ直々のオーダーなんだよ。この企画は遊戯にやらせるべきだったよ」

「うっ……そっか」

途端、城之内くんは落胆し溜息をついた。

「そのチラシ、まだ公には出回ってないんだよ。まずは遊戯に参加を依頼する。もし断られたらこれで募集して、兄サマを含めた海馬コーポレーションのスタッフが厳選するって流れだ。」

だから城之内が選ばれるとしたら、遊戯がこれを断った上で兄サマに気に入られた時だな」

「一生来ねーだろ、それ。」

はあ……まあいいか。遊戯を指名する気持ちは分からんでもねえ」
「うーん、そうかなあ」

チラシから目を離し、正直な気持ちをモクバくんに伝える。

「海馬くんなら、こういうことは自分でやりたがると思うんだけど」

「まあ、そうなんだけどさ。今回の実験はちよつと違うんだよ」

——待って。

今、聞き逃せない単語があった。

「……モクバくん。実験って何？」

「え？ ああ心配すんな、そんな怖いことじゃないんだ。今回テストするデュエルディスクは、海馬コーポレーションの最新技術をふんだんに使った特別製なんだ。」

正直オレもよく分かってないんだけど……なんでも、異次元の決闘者とデュエルするとか言ってた」

「異次元？」

「ああ。こう、専用のゴーグルをつけてき。違う世界の決闘者とデュエルできるんだって」

「ふーん……」

言葉で説明されてもイマイチピンと来ず、もう一度手元を見た。そこにはベータテストで使われるであろうデュエルディスクの画像が載っている。これをつけてデュエルする、ということだろうか。

黙ってチラシを眺めていると、モクバくんは得意げに補足した。

「実はこのデュエルディスク、もう殆ど完成してるんだぜ。」

今回遊戯に頼みたいのは最終テスト。ただ、最後の最後で不備があるといけないから、兄サマも裏方に回るらしいぜ。今回のデュエルディスクは、バトル・シテイの時の初期型以上に力を入れてるんだ」

「ふむ、中々面白そうじゃな」

「爺ちゃん？」

爺ちゃんは後ろで手を組み、少し離れてこちらを見た。

年を重ね、皺だらけになった顔。けれど、その奥にある瞳は変わらず。

「こちらの思いを見透かすように、爺ちゃんは優しく笑いかけた。

「遊戯よ。お前さん、これを受けてみたらどうじゃ？ 何かを掴めるかもしれないぞい」

「そんな気楽な」

「気楽でいいんじゃないよ。それが若さの特権じゃ。」

遊戯。失敗が許される時期にこそ挑戦を繰り返し、うんと失敗するんじゃない。どんな結果になろうと、その経験は必ずお前さんの未来に繋

がるぞい」

「爺ちゃん……」

つい持論を語るのには年寄り共通の癖なのかもしれない。

普段は鬱陶しいことこの上ないけど……この時は、少しばかり役に立った。

ボクはデュエルが好きだ。それだけはこれからもずっと変わらないだろう。

なら、断る理由はなかった。

「モクバくん」

改めてモクバくんを見る。

似合わない白のスーツ姿。子供が大人に近づこうと頑張っている姿。

進路。

この言葉で真っ先に思い浮かぶのは杏子だ。彼女はダンサーになるのが夢で、そのために随分前から動き出している。

城之内くんもまたプロデュエリストという進路を決め、彼なりに歩き始めた。

なら、自分もそろそろだ。

ゆっくりでいい。重い腰を上げて、少し遠出をしてみよう。

「この依頼、受けさせてもらおうよ」

道場破り!? その名は「武藤遊戯」!

時を待たずして、その日はやってきた。

海馬コーポレーションが開発した新型デュエルディスク『デイメンジョン』の最終テスト。その被験者として自分——武藤遊戯が指名されたのだ。

事前に聞いた話によると、『デイメンジョン』はこことは違う別世界、すなわち異次元の決闘者^{デュエリスト}とデュエルができるらしい。

社長の海馬瀬人——海馬くんは『デイメンジョン』の開発にこれでもかと力を注いでいて、今回の最終テストでも彼はバックアップに回るようだ。

彼の性格を考えれば、こういったテストは自分でやりたがるものだと思いますけど……今回のテストは、それほど大事な案件なのかもしれない。

ズラリと並ぶ無数のデュエルリング、その中央。自分以外誰もいないリングの上で周りを見渡す。

本日、海馬ランドは閉館。お客さんは“一部を除いて”誰もいない。休日でこそ賑わうここでは非常に珍しい光景だ。

「おー。久しぶりに来てみたけど、やっぱり広いなーここ」

「なんでオメーがいるんだよ本田。今日のこととは世間一般には知らされてねーはずだぜ。新聞にも載ってなかったしよ」

1人目、妙に尖ったりゼントの青年——本田ヒロトがデュエルリングを見て眩き、すかさず2人目、城之内くんが不満げに文句を言う。「まあまあ、いいじゃないこれくらい」

3人目、真崎杏子。幼少の頃から付き合いのある幼馴染。イメチェンでもしたのか、髪は後ろで一つに括られている。

ダンサーを目指してるだけあって(？)、その身体は非常に健康的だ。出るトコロは出て、締まるトコロは締まる。かといってだらしないわけでもない。世間一般的には美人^{モデル}カテゴリーに属するだろう。「そうだよ。なんでも今回のは、海馬くん直々に遊戯くんを指名したそうじゃないか。気になるのは当然だよ」

4人目、獯良了。杏子が美人モデルなら、こちらは美人イケメンだ。

転校生という非日常的な立ち位置と、優しげ、物憂げな表情が異性に人気がある……らしい。

以上、観客4名。いつもの4人。

ちなみに全員私服。男子勢（自分含む）はいつもの服を着回してるが、唯一杏子は新コスチュームである。

……杏子を見てみると、幼馴染としては意識せざるを得ない。

いつも同じ服というのは安心感こそあるものの、やっぱりどこか味気ない。私服に関して色々勉強、もとい冒険すべきだろうか……？

「フン、またいつものギャラリーか。随分とお気楽なことだな、遊戯」
バサリ、とコートが靡なびく。満を持して、主役兼脇役が登場する。

海馬コーポレーションの若き社長にして天才、海馬瀬人その人である。

その存在感、カリスマ性は圧倒的だ。登場して一言喋るだけで、駄弁っていた4人が静まり返る。

「遊戯、準備はいいな？」

肯定以外を許さない威圧感。

敵対してるわけでもないのに、と心の中で愚痴る。

とはいえ、既に準備は出来ている。海馬くんの確認には頷きで答えた。

「よし、スタッフは準備に入れ！ 磯野、遊戯に例の物を」

「はっ」

海馬くんの後ろから黒スーツのスタッフが数名現れ、台車を押して機材を運び始める。

その動きは洗練されており、流石というほかない。

磯野と呼ばれた側近の男は海馬くんからデュエルディスクを受け取り、無数にならぶデュエルリングを横切つてこちらへ歩いてきた。

「武藤遊戯。これが新型デュエルディスク『ディメンジョン』と、そのゴーグルだ」

2種類の機械を受け取る。

1つはデュエルディスク。性能は勿論、デザインも1から考えられ

ているようで、バトル・シテイの時に使われた物とは似ても似つかない。

——格好いい。そんな、シンプルな感想が浮かんだ。

ただ、もう一つはよくわからなかった。

水泳、バイク、材料加工等に使用されるゴーグルは、目を保護するために何かしらの防壁があるものだ。

けれどこれはそういったものがない。かろうじて耳にかける機械だというのは分かるが、目を守る機構は存在しない。現存する物で例えるなら、モノクルが一番近いだろうか。

『『デイメンジョン』とデツキをセットし、ゴーグルをかけろ。それを合図に実験を開始する』

連絡事項を伝え、磯野……さんはデュエルリングを後にした。

その頃には既にスタッフの準備は終わっていた。怪しげな箱型の機械が幾つも並び、全員がパソコンを開いて画面を睨んでいる。

「モクバ、マイクとモニターの用意だ」

「了解だよ兄サマ。あーそれと、モニターのことなんだけどさ。あいつらもいいかな?」

モクバくんは親指で城之内くん達を指して、海馬くんに懇願する。

海馬くんは数秒ほど逡巡した後、

「……勝手にしろ」

無表情のまま、そう告げた。

「ありがとう兄サマー。おーい、おまえらー!」

了承を得た後、モクバくんは4人の方へ走っていった。

海馬くんはそれを見送った後、ケーブルで機材同士を繋ぐ。

——しばらくすると、あらかじめフロアに設置されている巨大モニターに、武藤遊戯の姿が映し出された。

断片的に聞こえてきたモクバくん達を会話を纏めると……モニターを通じて自分のデュエルを観戦するらしい。

「遊戯、こちらの準備は既に整っている! 貴様も早くデュエルデュエルを装着しろ!」

早く実験を始めたいのか、それとも単なる照れ隠しか。海馬くんは

回る必要はなかったか。

まあいい、一先ずは褒めてやるぞ遊戯。貴様のお蔭で次元間の移動が可能ということが、科学的に証明されたのだ』

海馬くんが通信機越しに上機嫌で言う。実験が上手くいってご満悦のようだ。

「ちなみに海馬くん、ボクはそっちに帰れるんだよね？」

『その点は心配要らん。が、それは断じて認めん。せつかく異次元へ移動したのだ。デュエルの1つでも見せてみる。』

そら。ちようど目の前に絶好の獲物があるぞ』

海馬くんに言われて正面を見る。

奇異の目で見ていた8人。そのうち7人は一箇所に集まり、こちらを観察している。

そして1人——保護者と思われる、炎を模したジャージの男——が歩み寄り、尋ねる。

「えーつと。君、名前は？ どこから来たのかな？」

「ボクは——」

『俺の名は決闘者^{キング・オブ・デュエリスト}の王、武藤遊戯！ 道場破りに来てやったぜえ！』

『何っ……!?!』

突然、耳をつんざくほどの大声がゴーグルから発せられた。遅れて海馬くんの声。

声の主は城之内くんだった。慌ててゴーグルを操作し、通信の音量を下げる。

それと同時に、周囲の状況……具体的には、この場にいる計8人の様子を観察する。

——地雷を踏んだ。そう直感した。

危機的状况を察知し、男の人から距離を取る。

『城之内、お前なんてこと言うんだ！ マイク返せ！』

通信機からモクバくんの声が聞こえる。

……そういえば次元移動する前、海馬くんはマイクを持っていた。きつと、こちらと通信するための専用マイクがあるのだろう。

それをモクバくんが城之内くんに渡して、城之内くんが面白半分で

余計なことを言った、というところかな。

「道場破りい!?」 L D S に続いてまたか!?

だが、遊勝塾を舐めるなよ! こつちにはとっておきがあるんだからな! 行け遊矢、柚子! 遊勝塾の底力を見せてやれ!」

「……………」

案の定、目の前では大変なことが起こりそうだった。

男の人からは明確な敵意と、焦がすような熱い視線が向けられる。一触即発というやつだ。

——とはいえ、殆ど一人相撲だったのは言うまでもない。

この場所……『遊勝塾』の生徒と思われる後ろの子達は、冷めた目で彼を見ている。

『なんだよ、別に間違ってるねーだろ? ケンカを売るならこう言うのが一番早いんだよ』

『向こうにいるのはお前じゃなくて遊戯だ! あんまり下手なこと言うとうと遊戯が動きづらくなるんだぞ!』

『へ? 一回デュエルして終わりじゃねーのか?』

『んなわけないだろ! デュエルディスクが商品化したら、向こうの決闘者デュエリストと何度もデュエルするんだぞ! 多分!』

『そーなのか!』

ん? それってつまり、俺にも可能性があるってことか!』
『ああそうだよ!』

そしてそれだけじゃない! 今後の予定次第では、遊戯は何度もあつちに行くことになるんだよ!』

『マジか! よっしやあ!』

って、あれ? マジでか!? すまん遊戯!』

「……………あはは」

今更詫びられても時既に遅し。苦笑いするのが精一杯だった。

「——三連戦だ」

男の人は腕を組み、仁王立ちして宣言する。

「たった一人で道場破りを名乗るからには、相当腕に自信があるのだろう。」

だったら三連戦だ！ 三回連続で遊勝塾の生徒が君とデュエルを行う。三連勝なら君の勝ちだ。遊勝塾の看板は持つていくといい。ただし、一度でも負ければそこまでだ！ この塾から出て行ってもらうぞー！」

「は、はいっ」

ビシツと指を差しての戦線布告。

彼の瞳には、闘争心という名の炎が燃え盛っている。

『フン、面白い。それくらいの手ンデがなければ勝負にならないからな。行け遊戯！ 無様なデュエルを晒してくれるなよ』

「――」

こつちもメラメラ燃えていた。

先程の城之内くんといい、血気盛んなことこの上ない。

「……………はあ」

頭を抱えたくなるのを堪えて、これ見よがしに溜息をつく。

当然海馬くんは聞いていない。聞いていても無視するだろう。

……………これはもう、観念して付き合うしかない。

デュエルディスクを展開し、名乗り上げる。

「武藤遊戯です。遊勝塾の皆さん、ボクとデュエルしてください」

――かくして、武藤遊戯VS遊勝塾の決闘が始まるのであった。



遊勝塾の生徒達は全員観客席へ移動した。

三連戦ということは、デュエルの相手は3人。

とはいえ、誰が来るかは大体想像がつく。

総勢8人のうち、候補は5人。

一人目は塾長と親しまれている男の人。観客席へ移動した今もお、時々熱い視線を送ってくる。

二人目は首に緑のペンダントを提げた少年。年齢はモクバくんより少し上くらいか。理由はまだ判明していないが、どうも塾長って人に一番頼られているみたいだ。

三人目はノースリーブの制服・ネクタイにミニスカートの少女。年齢はペンダントの少年と同じくらい。一番燃えているのが塾長なら、

一番落ち着いているのが彼女だ。この集団のまとめ役なのかもしれない。

四人目は赤いハチマキ、白い学ラン、長いリーゼントの少年。身体はペンダントの少年より一回り大きい、顔にはまだ幼さが残る。年齢は同じくらいだろう。

五人目は、黒いアンダーシャツの上に青い制服を着た子。年齢はモクバくんと同じくらいか。棒つきの飴玉を口に入れ、頭の後ろに手を組んで退屈そうに眺めている。

『遊戯ー』

通信機から女性の声が漏れる。杏子だ。

「杏子？ どうしたの？」

『ううん。特に用はないんだけど、大丈夫かなって。遊戯、本当にそっちにいるんだよね？』

「？ どういうこと？」

『さつき海馬くんも似たようなこと言ってたけど、こっちには遊戯の姿がないのよ。モニター越しでなんとか確認できるだけ。ああ、こういうところに遊戯がいるんだなって』

モニターというのは、次元を移動する前に見た巨大なモニターのことだろう。あれにはさながらゲーム画面のように、自分の後ろ姿が映っていた。

……そういえば、あの映像はどうやって撮ってるんだろう。実は後ろに目に見えない定点カメラなんかあったりして。

『遊戯？』

「心配要らないよ。これはデュエルなんだから。折角なんだし楽しむ。杏子はそこからデュエルを見ててよ」

『……うん』

安心したような声音を最後に、杏子からの通信は途絶えた。

しばらくして、デュエルの相手が運動場に現れる。

対戦相手は……緑のペンダントを提げた少年だった。大きなゴーグルと白い制服、緑のカーゴパンツ。マントのように制服を着こなすスタイルは、かつての“自分”を思い出させる。

「あのー。デュエルの前に一つ聞きたいことがあるんだけど、いい？」
少年はおずおずと片手を挙げ、尋ねる。

「? いいけど、何?」

「貴方は本当に道場破りですか?」

「違います」

丁寧に即答する。こういうことはハッキリ言っておかないと大変なことになる。

何故なら今、その「大変なこと」が起こっている。城之内くんの失言の後、すかさずフォローしていれば誤解されなかつたかもしれない。

ペンダントの少年は数回瞬きした後、大きく溜息をついた。

「はあ……やっぱりなあ。道場破りにしては大人しいなと思ったんだ」

「ゴメンね、勘違いさせたみたいで」

「いえ、違ったならいいんです。これで余計なことを考えずにデュエルができます」

少年はズボンのポケットから赤い端末を取り出し、左腕に装着した。端末からメインデッキ・エクストラデッキが出てきて、ソリッドビジョンの板が展開される。

その光景を見て、ここは異次元なんだと改めて認識した。

物理法則を無視したデュエルディスク。あれは海馬コーポレーションでも開発されていない。

「それじゃ、塾長ー!」

「ああ! 両者共に準備はいいな!

アクション・フィールド、オン! 第一ステージはこれだ! 《マジ

カル・ブロードウェイ》!」

「っ!」

頭上から激しい機械音が響いた。

音源を確認するため見上げると——未知の機械が光を発し、忙しく作動していた。

——再度、世界が一変する。

次元移動とは違う。人物はそのまま、背景のみがガラリと変わる。

上空は暗闇に包まれ、光溢れる建物が並び立つ。

夜の街。眠らない街。そんな言葉が連想されるフィールドだ。

感嘆の吐息が漏れる。

ブロードウェイと言えばニューヨークの劇場街。街区を貫くメイ
ンストリート。行ったことはないから知らないけど、よくミュージカ
ルが開催されてるとか。

勿論これは作り物、フィールド魔法の類だ。スイッチ一つで消えて
しまう夢の建物。

それでも。いつか杏子はこういう場所へ旅立つのだと思うと、心が
躍った。

——パチン、と指の音。

ペンダントの少年は空を指差し、高らかに名乗り上げる。

「レディース、エーンド、ジェントルメン！」

ワタシの名前は榊遊矢！ 武藤遊戯さん、及び観客の皆様方！

これより榊遊勝の息子、榊遊矢によるエンタメデュエルを開催しま
す！ どうかコールには合いの手を！」

「合いの手？」

何のことか分からず首を傾げるが、そんなことで流れは止まらな
い。

「戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が！」

「？」

突然、ペンダントの少年——“榊遊矢”が声を張り上げた。

……戦いの殿堂に集いしデュエリスト達。

もしかして自分のことかと再度首を傾げたが、それは間違いだとす
ぐ気づかされた。

「モンスターと共に地を蹴り、宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」

「？ ……？」

何が始まるのか分からないまま、観客席から口上が響く。

誰も待つてくれず、教えてくれることもない。

「見よ、これぞデュエルの最強進化系！」

「アクション——！」

「……………？？」

この凄まじいアウエー感。確実に何かが起きてるのだが、何一つ理解できない感じ。知らない場所に放り出されて迷子になった気分だ。

実際、迷子みたいなものだけど。

「デュエル！」

「……………デュエル！」

一瞬遅れて最後のみコール。

結局、理解できたのはここだけだった。

エンタメデュエリスト、榊遊矢

デュエル開始の宣言と同時に、上空に大量のカードが出現。エフェクト、サウンドを伴って各地に弾けた。

カード達がヒラヒラとブロードウェイに落ちる。表は緑、裏にはAの文字。一見魔法カードのようにも見えるが――。

「……うーん」

……何もかも分からない、というのが正直な感想だった。

両者共にライフポイントは4000。ターンプレイヤーは武藤遊戯。一応はこちらの先行だ。

「……ボクはモンスターをセット！」

リバース
伏せカードを2枚セットして、ターンエンド！」

壁モンスター、伏せカードを場に出し、ターンを終える。

とにかくまずは様子見だ。アクションフィールドとアクションデュエル。これらのルールを把握できていない以上、後手に回るのは仕方がない。

「ワタシのターン、ドローー！」

後攻、榊遊矢くん。彼は手札から2枚のカードを摘み、こちらに公開する。

カラーは橙と緑。効果モンスターと魔法の二色を持つカードだった。

「ワタシはスケール1の《星読みの魔術師》と、スケール8の《時読みの魔術師》で、ペンデュラムスケールをセッティング！」

遊矢くんは二色のカードをソリッドビジョンのディスクにセットする。

彼の両隣に青い光の柱が出現し、2体の魔術師が浮上する。

星読み――白い魔術師が数字の1を。

時読み――黒い魔術師が数字の8を指し示す。

『――』

通信越しでも分かる。この光景を見ている者、全員が息を飲んだ。上空に浮かぶ2体の間に巨大なペンダントが現れる。

「揺れる、魂のペンデュラム！ 天空に描け光のアーク！」
ペンダントは左右に揺れ、光の軌跡を描き始める。

「——ペンデュラム召喚！ 現れる、ワタシのモンスター達！」
遊矢くんが手を振り上げた瞬間、虚空に孔が開いた。

そして、孔から二つの光……モンスターがフィールドに落下する。

「レベル4！ 《E^{エンタメイト}Mシルバー・クロウ》！」

レベル7！ 《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》！」

現れたのは2体。巨大な爪を持つ狼と、二色の眼を持つ赤き竜。

そのうちの一体は、本来なら2体の生け贄を必要とする上級モンスターだった。

即座にデュエルディスクを確認する。しかし反応はない。今の召喚は至って正常なものらしい。

『フン……なるほどな。ここにシフトした理由はこれか』

海馬くんは一人で納得したように呟いた。

……分析は彼に任せよう。今はこのデュエルに集中する。

未知のフィールド、未知のカード、未知の召喚法。ここは完全に相手の土俵。油断すればきつと負ける。

「いかがでしょうか、遊戯さん。これがペンデュラム召喚。スケールに挟まれたレベルのモンスターを一度に召喚できる召喚法です」

「うん。凄いなと思うよ」

適当に相槌を打ちながら、4体のモンスターを観察する。

気になったのは宙に浮く2体の《魔術師》だ。あれには何か仕掛けがあると、決闘者^{デュエリスト}としての感が告げていた。

「ありがとうございます。でも、だからって手加減はしませんよ！

さあ、バトルです！ シルバー・クロウで守備モンスターを攻撃！」
銀狼がブロードウェイを駆け、巨大な爪で守備表示のカードを切り

裂く。

けれど、それは狙い通り。

シルバー・クロウが破壊したのは赤いマシユマロ。

柔らかい身体でマカロンを形作るモンスター、すなわち《マシユマカロン》。

「ここで、『マシユマカロン』の特殊効果発動！

このモンスターは破壊された時、分裂復活する！」

デッキから新たに2体の『マシユマカロン』を守備表示で特殊召喚。

このカードは破壊された時、一度だけ同名カードを手札・デッキ・墓地から特殊召喚できる。

プレイヤーを守る壁であり生け贄。動きが単純な分読まれやすいが、使い勝手もいい。

「ワタシの攻撃はまだ残っています！ 行け、オッドアイズ！」

「永続罨^{トラップ}、『光の護封霊剣』！」

ライフを1000ポイント払い、相手モンスターの攻撃を封じる

！

罨^{トラップ}カードを発動。3本の光剣がドラゴンを妨害するべく発射された。

目的は生け贄の確保。手札に上級モンスターはないが、次のドロー、もしくは手札の魔法カード^{マジック}で引けるかもしれない。

「甘いですよ、遊戯さん！ 『時読みの魔術師』のペンデュラム効果発動！

ペンデュラムモンスターが戦闘を行う時、ダメージステップ終了時まで相手は罨^{トラップ}を発動できない！

——『インバース・ギアウイス』！」

「っ……!?!」

『時読みの魔術師』の右手のガントレットから、時を刻むように曲線が描かれる。

時が逆流する。発射された光剣は巻き戻り、『光の護封霊剣』が再度伏せられた。

「攻撃は続行！ 『オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』の攻撃！

——『螺旋のストライク・バースト』！」

竜のアギトが開き、赤熱のブレスが『マシユマカロン』を焼き尽くした。

守備表示だったためダメージはない。むしろ今の攻防で『時読みの魔術師』の効果を把握できたのはプラスだ。

となればもう一体、《星読みの魔術師》の効果も推測できる。
時読みと対となる外見、名称。罨トラップカードと対、すなわち魔法カ
ドを封じる《魔術師》と見て間違いない。

「さて、これでワタシのモンスターは攻撃を終了しました。

ですが！ お楽しみはこれからです！」

攻撃は全て終了したが、それを否定するように遊矢くんは走り出
す。

彼の目先にあつたのは、一枚のカード。裏面には大きく『A』の文
字。

——それを、拾った。デュエルディスクに入れ、すぐさま発動させ
る。

「A 魔法 《ワンダーチャンス》！」
アクションマジック

このカードは、モンスター1体の攻撃を1回だけ増やすことができ
ます！ 対象は勿論、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》！」
「え……!?!」

竜の眼が輝き、小さく咆哮する。

視線の先には2体目の《マシユマカロン》。

「さあ、オッドアイズ！ もう一度《マシユマカロン》に攻撃！

——『螺旋のストライク・バースト』！」

「っ……!」

二度目のブレスが吐かれ、2体目の《マシユマカロン》が消滅した。
これで自軍のモンスターは全滅。

……想定外の攻撃だったが、ライフは無事だった。

冷や汗を拭いつつ、もう一度確認する。

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》は確かに攻撃を終了した。
ところが、遊矢くんが魔法カードマジックを拾って発動。これにより二度目
の攻撃を可能にした。

……段々と仕組みが分かってきた。

この《マジカル・ブロードウェイ》は、アクションA カードを使うための
フィールド魔法なのだ。デュエル開始時、両者のフィールドに無条件
で発動する。それがアクションデュエルというスタイル。

そしてフィールドに散らばったAカードは、その場で拾って使えるアトラクション。

……インドア派には厳しいデュエルだ。これが城之内くんや海馬くんだったら話は違っていたかもしれない。

正直、体力にはあまり自信がない。長引けばそれだけ不利になる。

「ワタシはカードを1枚伏せて、ターンエンドです！」

遊矢くんは伏せカードを一枚出し、終了を宣言した。

——そういえば、と手を止める。気になったので聞いてみる。

「遊矢くん。さつきとは口調が違うみたいだけど、どうかしたの？」

「え？ ああ、これですか？」

俺は将来、父さん——『神遊勝』みたいなエンタメデュエリストになりたいんです」

少しだけ恥じらいを感じつつも、遊矢くんは得意げに笑った。

……そうか。彼にも目指すものがあるのか。

「何事もカタチからってことです。デュエルで皆を笑顔にする。

……いつか俺も、そういう決闘者になりたいんだ」

遊矢くんは遠い目で空を仰いだ。

彼の目には何が映っているのか、赤の他人の自分には分からない。

それでも——『エンタメデュエリストになる』、というのはいいと思う。

大きな目標がある人は、それだけで好感が持てる。

「……そっか。じゃあ行くよ、遊矢くん。君のエンタメで、ボクを楽しませてよ！」

「はい、勿論です！」

……こほん！ さあ、かかってきなさい！」

「ふふ。ボクのターン、ドロー！」

デュエルを再開する。

……先程の遊矢くんの行動。アクションデュエルは決闘者の身体能力次第で強者にも勝てるデュエルだ。しかし逆に言えば、体力のない者は決定的に不利。

狙うべきは短期決戦。だが一つ壁がある。ペンデュラム召喚だ。

融合召喚ならば《融合》、儀式召喚ならば《儀式魔法》のように、特殊な召喚法には必ず鍵が存在する。これらの召喚法は強力だが、その鍵さえ封じれば怖くはない。

その点、このペンデュラム召喚は分かりやすい。この鍵は間違いなく両サイドに浮かぶ2体の魔術師。わざわざ2枚を使ったということは……おそらく、どちらか一方でも壊せば封じられる。

「ボクは永続罫 《光の護封霊剣》を発動し……更に魔法カード、《マジック・プランター》を発動。

永続罫を1枚墓地に送り、デッキから2枚ドローする」
発動できなかった《光の護封霊剣》を墓地に送る。

《マジカル・ブロードウェイ》には二回攻撃を可能にする魔法カードがある。加えて彼の場合には《時読みの魔術師》。このカードが残っていたところで意味はない。

「……よし」
新たに引いた2枚を確認。そのうち1枚は《ブラック・マジシャン》。

——これで攻められる。

「永続魔法 《黒の魔導陣》を発動！

発動時の処理として、デッキの上からカードを三枚確認する。その中に《ブラック・マジシャン》の魔術があつた場合、それを手札に加え、それ以外は好きな順番でデッキの上に戻す」

3枚をめくる……ビンゴ。

「ボクは《黒魔術の継承》を手札に加え、それ以外をデッキの一番上に戻す」

これで手札は揃った。

あとはカード操作の速さと、遊矢くんがAカードを見つけれられるかどうかの勝負。

「魔法カード発動！ 《黒魔術のヴェール》！

ライフを1000払い、手札か墓地から黒魔術師を召喚する！

現れる、《ブラック・マジシャン》！」

遊戯

LP：4000 ↓ LP：3000

紫の魔法陣が地面に刻まれ、中央から黒魔術師が現れる。

その名は《ブラック・マジシャン》。武藤遊戯が最も信頼するカードだ。

——さあ。反撃を始めよう。

「攻撃力2500。攻撃力は互角でも、ペンデュラムモンスターのオッドアイズには通じませんよ！」

「それはどうかな？」

《ブラック・マジシャン》が召喚されたこの瞬間、《黒の魔導陣》が発動する！」

《ブラック・マジシャン》が杖を向けた瞬間、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の足元に魔導陣が浮かび上がる。

それは転移魔法。対象を次元の彼方へ飛ばす黒魔術——！

「これは……!?!」

「《黒の魔導陣》は《ブラック・マジシャン》専用のサポートカード。

《ブラック・マジシャン》が召喚された時、相手フィールドのカードを1枚、ゲームから取り除く！」

「くっ——させるか！」

速攻魔法発動、《禁じられた聖槍》！

このターン、オッドアイズの攻撃力を800下げる代わりに、あらゆる魔法・罠マジック・トラップから守る！」

天上から槍が垂直に落ち、オッドアイズの足元に描かれた魔導陣を突き刺した。

魔力は霧散し、《ブラック・マジシャン》の魔術は不発に終わる。

「やるね！でも、魔術はまだ残ってるよ！」

手札から魔法カード発動、《黒・魔・導》！

場に《ブラック・マジシャン》がいる時、相手の魔法・罠マジック・トラップカードを全て破壊する！

——行け、《ブラック・マジシャン》！」

命令を受けた黒魔術師は跳躍し、杖を振りかざす。

狙いは宙に浮く2体の《魔術師》達。漆黒の魔力が杖に込められ――

—気合の叫びと共に、それを撃ち放った。

浮上した2体に抗う術はないらしく、黒魔導をまともに受けて消滅した。

「ペンデュラムカードが破壊された……！」

彼の驚きようを見るに、やっぱり2体のペンデュラムモンスターが鍵だったみたいだ。

ペンデュラム召喚を封じた今が好機。ここで、一気に畳み掛ける——！

「行くよ、ボクのバトルフェイズ！ 《ブラック・マジシャン》で、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を攻撃！

——『黒・魔・導』！』

黒魔術師が続けて杖を振るい、漆黒の魔導弾が放たれる。

対象は二色の眼の竜。遊矢くんはAカードを探したが間に合わず、オッドアイズは破壊された。

《禁じられた聖槍》で引かれていた数値分、ライフダメージが発生する。

遊矢

LP：4000 ↓ LP：3200

「くっ——」

「バトルフェイズはこれで終了。

ボクは更に魔法カード《黒魔術の継承》を発動。

墓地の2枚の魔法カード——《マジック・プランター》、《黒魔術のヴェール》を除外して、デッキから《ブラック・マジシャン》系統の魔術を手札に加える」

デッキを参照したことでオートシャッフルが起動。《黒の魔導陣》で固定されたデッキトップが変わる。

……手札に加えたのは《師弟の絆》。これで次のターンに備える。
「魔法カード《師弟の絆》を発動。

自分の場に《ブラック・マジシャン》がいる時、手札・デッキ・墓地から、《ブラック・マジシャン・ガール》を守備表示で特殊召喚できる！

来い、《ブラック・マジシャン・ガール》！」

自身の呼びかけに応え、青い魔術衣装の弟子が現れる。

表示形式は守備。師匠である《ブラック・マジシャン》が先導し、後ろには弟子の《ブラック・マジシャン・ガール》が控えているカタチだ。

「ボクはこれで、ターンエンド」

終了を宣言。通常のデュエルならこのまま相手のターンを待てばいいのだが、アクシオンデュエルではそうもいかない。

次のターン、遊矢くんがどんなAカードアクションを使ってくるか分からない。今のうちに1枚くらいは確保しておかないと。

「やりますね。でも、まだ勝負は分かりませんよ！ 俺のターン、ドロー！」

「……………」

完全に「ワタシ」から「俺」に戻っている。

今の遊矢くんは素だ。油断・慢心の類は期待できない。

「このままバトルだ！ 《E Mシルバー・クロウ》で、《ブラック・マジシャン・ガール》を攻撃！」

シルバー・クロウの攻撃力は1800。対して《ブラック・マジシャン・ガール》の守備力は1700。

「シルバー・クロウが攻撃を行う時、バトルフェイズ終了時まで《E M》の攻撃力を300アップさせる！」

訂正、攻撃力2100。

といっても、訂正する意味は殆どない。どちらにせよ《ブラック・マジシャン・ガール》は戦闘破壊される。

けど、それはあくまで数値上の話。

いい機会かもしれない。ここらで一つ、武藤遊戯なりのエンタメをやってみよう——！

「伏せカードオープン！ 《マジカルシルクハット》！」

《ブラック・マジシャン・ガール》の頭上から巨大なシルクハットが現れ、彼女の姿を覆い隠した。

そして分裂。シルクハットは三つに分かれ、シルバー・クロウを惑

わす。

「え？ 遊戯さん、これは……」

「《ブラック・マジシャン・ガール》はシルクハットに身を隠した。その三つのうち、どれかに彼女は隠れている。

ちよつとしたクイズだよ。さあ遊矢くん、見事彼女を当ててみせて！」

「うっ……ぐぐ」

遊矢くんは難しい顔をして唸り始める。

……我ながら詐欺だなと思う。

《マジカルシルクハット》は^{マジック}デツキから^{トラップ}魔法・罠カードを2枚選び、攻守0のモンスターとして裏守備表示で召喚。その後、自分のモンスター一体を裏守備表示にしてシャッフルするカードだ。バトルフェイズが終了すれば、選択した^{マジック}魔法・^{トラップ}罠カードは墓地に送られる。つまり、墓地に布石を打つことができる。

「決めた！ 中央のシルクハットを攻撃！」

遊矢くんの指示を受け、シルバー・クロウの爪攻撃が炸裂。シルクハットは無残に切り裂かれる。

——中にあったカードは^{トラップ}罠。すなわちハズレである。

顔には出さず、心の中でほくそ笑む。今破壊されたカードこそ布石。

「外れた!？」

「残念♪」

バトルフェイズ終了時、シルクハットの効力は失われるよ。正解は、^{ここ}「こ」

シルクハットが消滅し、中から傷一つない《ブラック・マジシャン・ガール》が出てきた。上機嫌なようで、得意げにピースなんかしている。

ポジションは遊矢くんから見て左端。うん、惜しかった惜しかった。

「ぐぬぬ……カードを1枚伏せて、ターンエンド」

結局、^{アクション}A カードは使われることなくターンが終わった。この

カードは戦略的に使えるかもしれない。

勿論口にはしない。これはチャンスだ。逃す手はない。

「ボクのターン、ドロー！」

ドローカードを確認。

残念ながらモンスターを引くことはできなかった。彼との一番の差はこういうところかもしれない。

……ないものねだりをしてもし方ない。ここは攻撃あるのみだ。

「《ブラック・マジシャン・ガール》を攻撃表示に変更して、バトルフェイズに移行する！」

《ブラック・マジシャン・ガール》が攻撃態勢を取り、シルバー・クロウをギロっと見た。先程の攻撃に対して、何かしら思うことがあったらしい。

では、彼女のオーダーに応えよう。

「《ブラック・マジシャン・ガール》で、《EMシルバー・クロウ》を攻撃！」

——『黒・魔・導・爆・裂・波！』

魔術師の少女は青い杖を振りかぶり、赤い魔導弾を撃つ。

しかし、一瞬だけ遅かった。攻撃がヒットする直前、遊矢くんが
A カードを拾って発動させた。

「A 魔法 《ドラマチック・イリユージョン》！」

シルバー・クロウの攻撃力を、バトル終了時まで600アップさせる！

けれど、それは想定内。

目星をつけていた近場のA カードを手に取り、発動させる。
「A 魔法 《ハイダイブ》！」

このターンが終了するまで、《ブラック・マジシャン・ガール》の攻撃力は1000ポイントアップする！」

「なっ——!?!」

《EMシルバー・クロウ》、2400。

《ブラック・マジシャン・ガール》、3000。

運が味方してくれたのか、上昇値は少しばかりこちらが上だった。

なんにせよ結果は変わらない。銀狼は黒魔術の攻撃を受け消滅、ダメージが発生する。

遊矢

LP：3200 ↓ LP：2600

「っ——まだだ！ モンスターが戦闘で破壊された時、この伏せカードが発動する！」

速攻魔法カード《イリユージョン・バルーン》！

デッキの上からカードを5枚めぐり、その中に《EM》があった場合、特殊召喚できる！」

「そうはいかないよ！

墓地から罠カード、《マジシャンズ・ナビゲート》を発動！

自分の場に《ブラック・マジシャン》がいる時、墓地のこのカードを除外して、相手の魔法・罠カードを無効にする！

これで《イリユージョン・バルーン》は無効となる！」

「何っ!？」

《マジシャンズ・ナビゲート》は、《マジカルシルクハット》の効果で意図的に墓地に送ったカードである。

《ブラック・マジシャン》が手をかざした瞬間、遊矢くんの発動したカードに亀裂が入り、無効化される。

これで彼を守るモンスターは全滅した。すかさず攻撃命令を下す。

「行け、《ブラック・マジシャン》！」

—— 『黒・魔・導』！」

柄空きとなった彼の元に、再び黒魔術が放たれた。

遊矢

LP：2600 ↓ LP：100

「っ——……」

ダメージ2500、残りライフ100。

モンスターを引けなかったのが口惜しい。

経験則から言って、追い詰められた決闘者ほど恐ろしいものはない。

「ボクはカードを1枚伏せて、ターンエンド」

ドローフエイズに引いたカードを伏せる。そのままターンを終えて、相手を見据えた。

遊矢くんの場合にカードはない。エースモンスターを破壊し、得意技であつたらうペンデュラム召喚も妨害した。

それでも彼に、諦めの色は見えなかつた。

「強いですね、遊戯さんは。融合も、シンクロも、エクシーズも、ペンデュラムも使つてないのに、ここまで追い詰められるなんて。

でも、相手にとって不足はありません！　ここから逆転してこそエンタメです！」

「……………」

汗を滲ませつつ、笑顔を浮かべてくる遊矢くん。

……彼の言葉の中には、聞き慣れない単語が幾つかあつた。

シンクロ、エクシーズ。

ここにはまだ、ボクらが把握していない召喚法があるみたいだ。

「俺のターン、ドロロー！」

遊矢くんのターンが開始する。

キーカードを引くことができたのか、彼の表情が綻んだ。

「よし！　俺は魔法カード《アメイジング・ペンデュラム》を発動！

ペンデュラムゾーンにカードがない時、エクストラデッキから二種類の《魔術師》を手札に加える！」

「エクストラデッキから……？！」

遊矢くんはデュエルディスクの、エクストラデッキを収納する箇所から2枚のカードを取り出す。

二種類の《魔術師》とはおそらく、先程まとめて破壊した2体のことだろう。

……ペンデュラムモンスターは破壊されると、墓地ではなくエクストラデッキに行くらしい。

何故墓地ではなくエクストラデッキなのか。

墓地ならば《死者蘇生》を初めとした蘇生カードで再利用できる。ペンデュラムモンスターはこれに該当しない。

——まだ、何かある。

「俺は、手札に加えたスケール1の《星読みの魔術師》と、スケール8の《時読みの魔術師》で、ペンデュラムスケールをセッティング！」
一ターン目同様、2体の《魔術師》がディスクにセットされた。
光の柱が上り、モンスターが浮上。巨大なペンダントが上空に出現する。

「これでレベル2から7のモンスターが同時に召喚可能！」

揺れる、魂のペンデュラム！ 天空に描け光のアーク！

——ペンデュラム召喚！ 舞い戻れ、俺のモンスター達！——

「なっ……！」

それは、一ターン目の再現だった。

二色の眼の竜…… 《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》。

長い爪の銀狼…… 《E M シルバー・クロウ》^{エンタメイト}。

遊矢くんのフィールドには、確かに破壊したはずの2体が召喚された。

……そうか。

これがペンデュラム召喚最大の特徴。

破壊されたら墓地ではエクストラデッキへ。スケールさえ整っていれば、何度でも再召喚が可能なのだ。

「まだまだ、続けて行きます！」

俺は《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》と、獣族モンスター

《E M シルバー・クロウ》をリリースして、融合する！^{エンタメイト}

「融合!? でも、それなら《融合》のカードは……」

「心配ご無用！ このモンスターは召喚する時、《融合》のカードは必要としない！」

……なんて、デタラメ。

《融合》を必要としない融合召喚。

特殊な召喚法には鍵が必要と思っていたが、早くも訂正せざるを得ない。

「誇り高き銀狼よ。神秘の竜と1つになりて、新たな力を生み出さな！

——融合召喚！ 出でよ！ 野獣の眼光りし、寧猛なる竜！

《ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》！」

2体のモンスターが融合し、新たな竜が召喚される。

二色の眼はそのままに、各部位に黄土色の装飾が加わる。その姿は竜でありながら獣のよう。

攻撃力は3000。《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を、《ブラック・マジシャン》を上回った。

「ビーストアイズが戦闘で相手モンスターを破壊した時、融合素材となった獣族モンスターの攻撃力分、ダメージを与える！」

そして——！」

遊矢くんは、手近な場所に落ちていたA アクション カードを取った。

……仮に《ブラック・マジシャン・ガール》が破壊されれば、発生するダメージは2800。こちらのライフを0にするには、あと200届かない。

あと200。これを埋めるのはA アクション カード。彼はこのターンで決めるつもりなのだ。

「A アクションマジック 魔法 《イリュージョン・マーチ》！」

ビーストアイズはこのターン、攻撃力が300アップし、相手モンスター全てに攻撃できる！

バトルだ！ 行け、ビーストアイズ！」

指示を受け、獣の竜が咆哮する。

間もなく獄炎のブレスが魔術師達を焼き尽くすだろう。この攻撃を受ければ敗北。

——空に浮く《時読みの魔術師》を見る。

あれはペンデュラムモンスターの攻撃時のみ効果を発動する。

ビーストアイズは融合モンスターであって、ペンデュラムモンスターではない。

ならば——！」

「さあ、ファイニッシュです！」

——『ヘルダイブ・バースト』！」

ビーストアイズが火炎を吐き出す。炎は竜を象り、全てを喰い尽くさんばかりに牙を剥く。

最初の標的は《ブラック・マジシャン・ガール》。彼女が破壊されれば敗北だ。これを通すわけにはいかない……!」

「^{トラップ}永続罠、《テイメンション・ガーディアン》!

ガーディアンよ! 《ブラック・マジシャン・ガール》を守れ!」

赤い羽根・銀の鎧のミイラが現れ、《ブラック・マジシャン・ガール》を守護する。

エメラルドの光が額から放たれ、竜の炎はかき消された。

遊戯

LP : 3000 ↓ LP : 1700

ダメージが発生。しかし《ブラック・マジシャン・ガール》は健在。

《ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の効果は発動しない。

「攻撃が途切れた……!?!」

「《テイメンション・ガーディアン》はモンスターを守る守護兵。

このカードがある限り、対象となったモンスターはあらゆる攻撃から守られる!」

だけど、これだけでは止められない。ビーストアイズはこのターン、もう一回だけ攻撃できる。

伏せカードはもうない。^{リバース}A ^{アクション}カードに対抗するには、やはりA^{アクション}

カードしかない。

カードを探すため、ブロードウェイを走る。

「くっ……. だけど、^{アクション}A カードの効果でバトルは続行! 行け、ビー

ストアイズ! 《ブラック・マジシャン》を攻撃!

——『ヘルダイブ・バースト』!」

「っ…….」

カードは2枚見つかった。近くに1枚、少し遠くに1枚。

攻撃は迫っている。2枚とも取る余裕はない。そもそも、ルールの可能性が分からない。

——直感。遠くに配置されたカードのみを目指す。

遊戯

LP : 1700 ↓ 900

「っ——…….!」

背後で爆発音が響き、ライフが減少した。《ブラック・マジシャン》が破壊されたのだろう。

問題は次弾。

——間に合った。アクション A カードを手に取る。

「ビーストアイズのモンスター効果！」

戦闘で相手モンスターを破壊した時、融合素材となった獣族モンスターの攻撃力分、ダメージを与える！」

追撃のブレスが撃たれる。

カードを確認——脊髄反射じみた速度で、ディスクにカードを挿す。

アクションマジック 「A 魔法 《加速》！」

発生した効果ダメージを無効にする！」

間一髪。

ブレスは真横を素通りし、後ろにあった建物を破壊した。

攻撃力1800の追撃。獣の名を語るだけあって恐ろしい攻撃性だ。

「——はっ……っ」

急に走ったせいかわ、少し息が上がる。

体力の無い自分が情けない。

「っ——」

……また、ないものねだり。

悩むのは後にしよう。

今はただ、最善の選択をするのみだ。

「躲された……っ、ターンエンド！」

「ボクのターン、ドロー！」

これ以上 アクション A カードを使われるのは危険だ。

盤上は勿論だが、何よりプレイヤー自身が持たない。体力勝負になれば敗北は必然。

幸い、このドローでルートは繋がった。最短距離で勝負を決める……！

「行くよ遊矢くん！これが最後の攻撃だ！」

《ブラック・マジシャン・ガール》で、《ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を攻撃！」

「なっ——だけど、ビーストアイズの方が攻撃力は上！」

「そう、このままならね！」

まず一手。

ドロローしたカードをダメージステップに発動する。

「速攻魔法、《マジック・エクスペンド黒魔導強化》！」

お互いのフィールド・墓地の《ブラック・マジシャン》、《ブラック・マジシャン・ガール》の数により複数の効果を得る！

1枚以上の場合、黒魔術師の攻撃力を1000アップさせる！」

《ブラック・マジシャン・ガール》の攻撃力が上がる。

「攻撃力はお互い3000……！ だけど、アクションAカードなら！」

「そうはいかないよ！ 《マジック・エクスペンド黒魔導強化》、第二の効果を発動！」

2枚以上の場合、相手はこのカードに対して魔法・マジック罫を発動できない！

そして——！」

ここで二手。

弟子は師匠の力を受け継ぎ、獣の竜を打倒する。

「《ブラック・マジシャン・ガール》の攻撃力は、墓地の《ブラック・マジシャン》1体につき3000アップする！」

「何っ?！」

更に攻撃力上昇……数値にして3300。《ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を3000上回った。

チエツクメイト。これが最後のオーダーだ。

「行け、《ブラック・マジシャン・マジシャン・ガール》！」

——『ブラック・バリエーション黒・魔・導・爆・裂・波！』

少女はステップを踏み、高く跳躍した。

空中で杖を振るうと同時、紅の魔導弾がビーストアイズを撃つ。

「ぐあああ——！」

遊矢

LP：100 ↓ LP：0

残り僅かだったライフが削られ、デュエルは終了。

——勝者、武藤遊戯。

決着と同時に、アクションフィールド《マジカル・ブロードウェイ》は役目を終える。

光が溢れた煌びやかな景色は、夢から覚めるように消えて行き――

「……………ふう」

「……………ふう」

デュエルが一段落し、安堵する。

想定外の運動、慣れない場所でのデュエル、未知の召喚法。

そういったもので蓄積された疲労と、勝利による快感が全身を満たす。

なんだかんだ言つて、やっぱり勝利は気持ちがいい。負ければきつと悔しかったに違いない。

例えばそれが「アクションデュエル」だったとしてもだ。

それだけ、武藤遊戯はデュエルを好いているということかもしれない。

自分が打ち負かした相手を見る。

榊遊矢くん。ラストターンに《ブラック・マジシャン・ガール》の

攻撃で吹き飛ばされたらしく、尻餅について脱力している。

表情は些か残念そうで、惜しかったなーと小さく呟いた。

……彼は、父親のようなエンタメデュエリストになるのが夢らしい。

自分以外の誰かを笑顔にする。すなわち社会奉仕。身近な人のためではなく、世界中にいるその他大勢のために何かを成す者。

ふと、そうなった自分の姿を想像した。

スーツを纏い、シルクハットを被った武藤遊戯。シルクハットを取ると、中から白い鳩が飛び出して――

「……………」

残念ながら、イメージできたのはそこまでだった。

発想力が貧困すぎる。やっぱりエンタメは柄じゃない。

——でも。そういう進路も、悪くないんじゃないか。
自分の得意なことが誰かの役に立つとしたら、とても嬉しいことだ
と思うのだ。

選択肢が、また一つ増えた。

不動のデュエル、権現坂昇

『まずは一勝。当然の結果だな』

ゴーグルに内蔵された通信機越しで、海馬くんの退屈そうな呟きが聞こえた。

武藤遊戯ならば勝って当然という確信と、ある種の信頼が混ざった言葉だった。

『遊戯。ペンデュラム召喚についての感想を聞かせろ』

海馬くんは当事者としての感想を求めてきた。

当然といえば当然だろう。ボクらのいた世界にペンデュラム召喚なんてものは存在しない。ボク自身は勿論のこと、海馬くんだって初めて見たのだ。

「凄い召喚法だと思ったよ。一人の決闘者^{デュエリスト}として、とても興味が湧いた」

『それに関しては俺も同意見だ。あれはまだ底が知れん』

と、海馬くんは最後に意味深に付け足した。

「どういうこと?」

『俺の見た限り、ペンデュラム召喚には可能性が秘められている。先程榊遊矢がやってみせた融合召喚との併用がそれだ。もう少し探せば有効な活用法はごまんと見つかるだろう』

どうやら海馬くんの中ではペンデュラム召喚はかなりの高評価らしい。

そういえば、と先程のデュエルを思い出す。彼はペンデュラム召喚以外にも、^{アクション}Aカードと呼ばれるものを使っていた。

「アクションデュエルについてはどう思ったの?」

『愚問だな。あの程度、俺なら何の問題ない』

自信満々に即答された。

体力に関してもそうだけど、まだ一度も経験していないのにこの自信は流石と言う他ない。

『遊戯。次はシンクロ召喚、もしくはエクシーズ召喚の使い手とデュエルしろ。ペンデュラム召喚同様、詳細なデータを取りたい』

海馬くんの申し出に頷きで答える。個人的にもその二つは気になつていたので。

……まあ、この塾にそれらの使い手がいるとは限らないけど。

先程デュエルした榊遊矢くんは既に観客席へ戻り、炎を模したジャージの人——塾長さんと話していた。

遊矢くんは身振り手振りを交えて数回、塾長さんに何かを言う。塾長さんは大げさに仰け反つて——直後、デュエルフィールド入口の扉が勢いよく開かれた。

「遊戯くん！」

こちらに猛ダツシュし、目の前で急停止。間髪入れず、直角に頭を下げた。

「すまない！ 俺としたことが、君の話を最後まで聞かないまま勘違いしてしまったようだ！ 本当に申し訳ない！」

「いえ、誤解が解けてよかったです」

怒涛の勢いに怯みながらも答える。

遊矢くんが誤解を解いてくれたみたいだ。

「いやーよかったよかった。実は内心焦つてたんだよ。すぐにお帰り願おうと思つて一回戦から秘密兵器を投入したんだが、まさか負けるとはなあ。それも融合、シンクロ、エクシーズ、どれも使わない相手に。ま、遊矢もまだまだってことだな」

「いえ、遊矢くんは手強かったですよ。もう少しで負けるところでした」

アクションデュエルとペンデュラム召喚。先程のデュエルは何もかもが新鮮で、驚きの連続だった。

デュエル開始時にフィールド魔法を展開し、カードを散蒔^{ばらま}く。散蒔かれたカードはボーナスポイントみたいなもので、手に入れた者は自由^まに使用できる。

何より驚かされたのは、このデュエル形式はお決まりの口上が作られるくらいには一般的だということ。この世界の決闘者^{デュエリスト}はデュエルそのものの実力は勿論、本人の身体能力も高いのだ。

そしてペンデュラム召喚。秘密兵器と称したことから、やはり特殊

な召喚法なのだろう。少なくとも、この塾でのペンデュラム召喚の使い手は彼一人なのだ。

「それで遊戯くん、この後はどうしようか。試合はあと二回残っているけど、君を敵視する理由はなくなった。こっちとしてはお詫びに何かしてあげたいところなんだが……何がいいだろう?」

「そうですね。では、シンクロ召喚とエクシーズ召喚の使い手とデュエルさせてください」

「えっ……うーん」

途端、塾長さんは悩ましそうに腕を組んだ。

「シンクロとエクシーズ……シンクロ、エクシーズ、か……なあ、遊戯くん。融合じゃダメだろうか? 融合召喚のエキスパートなら一人いるんだが」

「そうですね……少し、時間を——」

『駄目だ』

「ください、と続けようとしたところで、海馬くんが代わりに答えた。ちよūd彼に判断を仰ごうと思っていたので、グッドタイミングではある。

『融合召喚など見飽きている。我々が観察したいのはシンクロとエクシーズだ』

「え? 遊戯くん、今の声は?」

『ただのナビゲーターだ。貴様が知る必要はない』

関係ない、と。海馬くんは姿を見せないまま、音声のみで拒絶を示した。

とはいえ、『ただのナビゲーター』なんて言い訳で相手が納得するはずもなく。男の人は眉間にシワを寄せ、怪訝そうにこちらを見ていた。

城之内くんと違う声だったのも大きいだろう。

——というわけでここは一つ、海馬くんをフォローしよう。

「彼はボクの友達です。訳あって人前に顔は出せないんです」

『何っ……!?!』

「なるほど友達か。Googleで見た映像を送ってるのかい?」

「はい。彼がシンクロ召喚とエクシーズ召喚が見たいそうで。なんとかなりませんか？」

「エクシーズは無理だが、シンクロはどうかかなるかもしれん。少し待っててくれ」

そう言つて、塾長さんは観客席に戻つていった。

彼はノースリーブの少女と何度か言葉を交わした後、白い学ランを着た大柄の少年に話しかける。

『遊戯イ……ッ、後で覚えていろ』

最後に怨念じみた呟きを残し、海馬くんからの通信は途絶えた。

……少々、調子に乗りすぎたかもしれない。

どんな報復があるのだろうか、実験に付き合ったのだから許して貰えないだろうか、などと益体やくたいもないことを考えながら、二番手を待つ。

赤いハチマキ。白い学ラン。大きなリーゼント。およそ少年らしくない少年は二つ返事で頷いた後、遊矢くんと同タイプのデュエルディスクを装着し、デュエルフィールドに出た。

「待たせたな。この男権現坂、僭越ながら遊勝塾の二番手を務めさせてもらう」

カツンと鉄下駄が床を鳴らす。同時に、一回戦とは違った空気が流れ始めた。

遊矢くんの時は、デュエルそのものを楽しもうとする空気だった。どんな結果であつても、最後に笑い合つて“楽しかった”と言い合えたらそれでいいと。

だが彼——“権現坂昇”は違う。その目には、絶対に武藤遊戯を打ち負かすという覚悟が宿っている。

「権現坂くん、だね。君が塾長さんの言つてたシンクロ召喚の使い手なのかな？」

「……それは買い被りだ。確かに俺はシンクロを使うが、習得して間もない未熟者。ことシンクロに限っては、他の塾の決闘者デュエリストの方が遥かに上だ。

しかし、デュエルは召喚法だけで勝てるほど甘くはない。それは先程、貴殿が遊矢とのデュエルで証明してくれた。

だからこそ今度はこちらの番。シンクロだけではない、我が権現坂道場の掲げる“不動のデュエル”をお見せしよう」

「権現坂道場……？ 君はこの生徒じゃないってこと？」

「確かに俺は遊勝塾の生徒ではない。だが、ここにきてそれは瑣末な^{さまつ}こと。」

俺は先程のデュエルを見て思ったのだ。融合・シンクロ・エクシズ。これらの召喚法を使わずに遊矢を打ち負かした貴殿と、是非手合わせ願いたいと！

決闘者同士がデュエルをする理由など、それで十分とは思わんか^{デュエリスト}？」

「……そうだね」

確かにそうだ、と頷く。

誤解は既に解けた。自分はもう道場破りではなく、従って彼らとデュエルする理由もない。海馬くんに言われた件だって、彼ら以外の決闘者^{デュエリスト}とデュエルすればいい。

けれど。権現坂昇くんは、デュエルを望んでいる。

遊矢くんとデュエルをその目で見て、今ここにいる武藤遊戯^ポ自身とのデュエルを望んでいる。

ならば、応えてあげるのが決闘者^{デュエリスト}としての礼儀だ。

「決まりだな。」

——では行くぞ。手加減は無用。貴殿もそのつもりで頼む」

「勿論」

戦いの熱気が両者の間に満ちていく。

心地よい刺激と緊張感。期待と恐怖がバランスよく混ざり合い、精神が昂ぶる。

そこに、火を点けるような塾長さんの声が響いた。

「第二ステージはこれだ！

アクションフィールド、オン！ 《剣の墓場》！」

頭上の機械が激しく稼働を始め、再び世界が変わる。

中心に炎が生まれ、境界線を引くように地面を奔る。

熱のない炎が視界を覆い尽くし——次の瞬間には、灰色の荒野が広

がっていた。

空は暗雲に覆われ、大地は枯れている。生命という生命が死に絶え、代わりに無数の剣が墓標の如く突き立っていた。

「……………」
その景色に、しばらく圧倒されていた。

感傷はない。これはあくまでフィールド魔法。デュエルのために用意された舞台でしかない。

ただ、リアリティは凄まじいものだった。モデルになった世界があるのではないかと疑うほどに。

「《剣の墓場》、か。いい判断だ、塾長殿」

「どういうこと？」

「このアクションフィールドは俺がシンクロ召喚を習得するきっかけとなり、同時に初めて披露した場所でもあるのだ。

貴殿はシンクロ召喚を所望しているのだろうか？ ならば、これほど相応しい場所はない」

カツン、と鉄下駄が地面を踏む。同時に、ソリッドビジョンのデュエルディスプレイが開かれた。

アクションデュエルが始まる。となれば当然、遊矢くんの時にもあつたあれが――

「戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が！」

「モンスターと共に地を蹴り、宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ、これぞデュエルの最強進化系！」

「アクション――！」

「……………」

生憎、一回聞いただけで全部覚えられるほど自分は賢くない。

黙っていても口上を進めてくれるギャラリーの皆さんには感謝しかない。

「デュエル！」



遊矢くんの時同様、上空にカードが出現し、弾ける。

同時に互いのライフポイントが表示され、デュエルがスタートした。

権現坂

LP：4000

遊戯

LP：4000

今回もまたアクションデュエル。こちらの世界では、通常のデュエルよりもアクションデュエルが主流なのかもしれない。

対戦相手・権現坂くんの全身を正視する。

身長こそ同じくらいだが、体格の差は火を見るより明らか。体力も遊矢くん以上だろう。 アクション A カードの奪い合いになれば勝ち目はない。

けれど、突破口は必ずある。ないなら作る。そう心に決めて、権現坂くんを見据えた。

「行くぞー！ 俺のターンー！」

俺は《超重武者カゲボウーC》セイを召喚！」

機械でできた虚無僧が召喚される。

「カゲボウーCセイの効果発動！ このモンスターをリリースすることで、手札から《超重武者》を特殊召喚する！」

動かざること山の如し！ 不動の姿、今見せん！ 《超重武者ビツグベンーK》ケイ！」

虚無僧が消滅し、そのモンスター効果が適用される。権現坂くんのフィールドに巨大な武士が召喚された。

よく見るとこちらにも機械だ。和風の鎧を模した橙の装甲。鋼でできた豪腕には、巨大な刺叉が握られている。

「守備力3500のモンスター……！」

圧倒的な守備力を前にして、思わず眩く。

“不動のデュエル”。なるほど、これは確かに不動だろう。

動かざる壁。立ちはだかるモノノフ。それはさながら弁慶の如く。「俺はこれでターンエンドだ！」

「じゃあ……行くよ、権現坂くん！　ボクのターン！」
カードをドロローし、手札に加える。

権現坂くんのフィールドには守備力3500のモンスター。これを突破するのは容易ではない。少なくとも、このターンでは倒すことはできない。

ただし、あれはあくまで壁。いくら数値が高かろうと所詮は守備力。こちらから攻撃しない限りは問題ない、ハズ。

「ボクは、《ベリー・マジシャン・ガール》を召喚！」

桃色の魔術衣装。口元にはおしやぶり。

ようやく歩けるようになったばかりの、幼き魔術師を召喚する。

「そのような幼子で我が不動のデュエルに挑むと？　この男権現坂、小手先の術で倒せるほどヤワではないぞ！」

「君を舐めているつもりはないよ。」

《ベリー・マジシャン・ガール》の効果発動。このカードの召喚に成功した時、デッキから《マジシャン・ガール》を一体手札に加えることができる。

ボクはデッキから、このモンスターを手札に加える」

手札に加えたカードを公開する。

爽やかなグリーンの髪、小悪魔めいた魔術衣装を着た少女、《チョコ・マジシャン・ガール》。

とはいえ、今彼女に一番はない。これはあくまで手札の補充。

本命は——このカード。

「更にボクは《ベリー・マジシャン・ガール》の力を使って、《沈黙の魔術師—サイレント・マジシャン》を特殊召喚！」

《ベリー・マジシャン・ガール》が風に包まれ霧散し、中から新たな魔術師を現れる。

銀色の髪をした温和な女性。女性らしく成長した四肢を包むのは、白を基調とした魔術衣装。《ブラック・マジシャン》とは対照的な魔術師である。

彼女は白い杖を構え、冷徹な瞳で《ビッグベン―K》と相対する。
「サイレント・マジシャンの攻撃力は、自分の手札1枚につき500ポイントアップする。ボクの手札は5枚。よって、攻撃力は3500となるー!」

「なるほど。先程、デッキからモンスターを加えたのはこのためか」
「そう。でも、それだけじゃないよ。サイレント・マジシャンは一ターンに一度、相手の魔法カードマジックの発動を無効にできる。

つまり、アクション A カードキラ。君がアクション A カードを使おうとすればサイレント・マジシャンが妨害し、その隙にボクが使う。彼女がいる限り、ボクは必ず1枚以上のアドバンテージを得ることができんだ」
「……どうやら、勘違いをしているようだな」
「え?」

「遊矢とのデュエルを経てアクション A カードを警戒し、対抗策を打つ。貴殿の底知れぬ実力、あらゆる戦局に対応する柔軟性には感服した。

だが、その認識には一つ穴がある。先程申した通り、俺が掲げているのは「不動のデュエル」。その真髄は動かずして勝つこと。元よアクション A カードに頼るつもりはない」

アクション A カードに、頼らない……?」

「その疑問にはデュエルで応えさせてもらおう。ターンは終了か?」

「……ターンエンド」

「うむ。では行くぞ! 俺のターン!」

権現坂くんがカードをドロ―した瞬間、モンスターもかくやというほどの突風が起きた。

どれほど身体を鍛えればこんなものが起こせるのか、非力な自分では全く想像できない。元来カードゲームとは机でやるもの。デュエルディスクの登場によってその認識は覆されたが、身体能力を必要としない点は変わらない。

だが、このアクションデュエルという概念は、更に認識を覆した。身体能力が高い方が決定的に有利。体格の良い権現坂くんは、まさにアクションデュエル向きの決闘者デュエリストと言える。

そのことは誰よりも本人が理解しているだろう。その上で彼は

言ったのだ。アクション A カードには頼らないと。

「俺は《超重武者ワカー02》を召喚！」

巨大な双腕を持った青いボディの超重武者が召喚される。

「ワカー02オニはフィールドに召喚された時、表示形式を変更することができる。よって、ワカー02オニを守備表示に変更！」

そして、また守備表示。

一ターン目に召喚された《超重武者ビッグベンK》ケイもまた守備表示だ。どちらも壁モンスターとしては優秀かもしれないが、それだけでは勝てないのがデュエルというものだ。

何かを待っている……？

例えば《波動キャノン》のような、一度に大量のダメージを与える魔法カードマジックか。

いや、それは違うだろう。彼は守ろうとしているのではない。特殊な戦術を用意しているわけでもない。将棋の一手目で歩兵を動かすように、何も考えず、愚直に、普通に攻めようとしている。

「更に、手札から《超重武者装留グレート・ウォール》の効果発動！自分フィールドの《超重武者》に装備することで、守備力を1200ポイントアップする！」

俺はこれを、《超重武者ビッグベンK》ケイに装備する！

権現坂くんはモンスターカードをさながら魔法カードマジックの如く発動させた。

巨大な緑の盾が出現し、ビッグベンKケイの片手に装着される。

驚異的な守備力、数値にして4700。ブルーアイズ・アルティメットドラゴン《青眼の究極竜》でさえ突破できない強固な壁となった。

「行くぞ、バトルだ！」

「バトル？ でも、君のモンスターは全て守備表示のはず——」

「フッ——これこそがビッグベンKケイの能力！ このモンスターがフィールドにいる時、《超重武者》モンスターは守備力を攻撃力として扱いバトルできる！」

行け、ビッグベンKケイ！ 《沈黙の魔術師—サイレント・マジシャン》を攻撃！」

ビッグベン——Kは盾を使って地面を叩き割り、衝撃波をサイレント・マジシャンに放つ。

守備力を攻撃力として扱う——つまり、このビッグベン——Kの攻撃の威力は4700。3500のサイレント・マジシャンで敵うはずもない。魔術師は衝撃波に吞まれて破壊され、消滅した。

遊戯

LP：4000 ↓ LP：2800

「くっ……だけど、《沈黙の魔術師——サイレント・マジシャン》は破壊された時、手札がデッキから《サイレント・マジシャン》《モンスター》を一体、召喚条件を無視して特殊召喚できる！

来い、《サイレント・マジシャンLV8》！」

細部——主に露出度——が異なる衣装を纏い、銀色の魔術師は再度降臨する。

こちらの攻撃力は常に3500。ビッグベン——Kの効果によりワカ——O2もまた攻撃が可能だが、その数値は2000。サイレント・マジシャンには届かない。

「ふう……驚いたよ。まさか守備表示のまま攻撃してくるなんて」

「これが我が権現坂道場の掲げる《不動のデュエル》。一歩も動くことなく、向かってくる敵を己の肉体のみで迎え撃つ。

故にこそ、俺は魔法・罠カードは一切使わん。当然、Aカードもだ」

「……そう。その理由は、訊いてもいいのかな？」

「無論。俺が《不動のデュエル》を貫くのは、それこそが最強であると信じているからだ」

権現坂くんの目に迷いはない。彼は嘘偽りなく、心の底からそれが最強だと信じている。

正直に言うと、彼の《不動のデュエル》はボクの考えとは正反対だ。強力なモンスターも結構だが、それを補助する魔法・罠がないと簡単にいなされてしまう。

でも——《一念岩をも通す》という言葉もある。どんな思想であれ、強い信念をもって貫ければあらゆることを成し遂げられる。

理解できなくとも、彼の志は認めるべきだろう。でなければ、このデュエルには勝てない。

「もしやと思うが、相容れぬと考えているのか？」
「え？」

「隠す必要はない。先程の遊矢とのデュエルを見れば誰でも分かる。状況に合わせてあらゆる魔法・罫マジック トランプを使い、圧倒的な力の差を『技』で埋める。貴殿はそういう決闘者なのだろうか？」

彼の指摘は、100パーセントと言い切ってもいいくらいに的中していた。

思いのほか慧眼らしい。とても遊矢くんと同い年とは思えない。

「……そうだね。ボクは君のデュエルを——『不動のデュエル』を肯定できない。だってボクのデュエルは、君のデュエルとは正反対にあるから」

「分かっているとも。同じ『不動のデュエル』でも、俺が目指すものと親父殿が目指すものは違う。デュエルの型は決闘者の数だけ……いや、それ以上に存在する。」

だが、だからこそ良いのだ。肯定できない？ むしろ望むところだ。俺には決してできないデュエルをここで見せてくれ。

——俺はこれでターンエンド！ さあ、来い！」

「……分かったよ、権現坂くん。それじゃあ見せてあげるよ、ボクのデュエルを！」

ボクのターン！ ドローー！」

カードを引く。これで手札は6枚。

前のターンでは『沈黙の魔術師—サイレント・マジシャン』の攻撃力を維持するため伏せられなかったが、もうその必要はない。

「伏せカードを2枚セットして、ターンエンド！」

ここでするべきは守りを固めること。

今の『超重武者ビッグベン—K』の守備力は4700。単純な強化のみでこれを超えるのは不可能だ。

「だけど——『逆』ならば。」

「仕込みは終わったようだな。」

罨であることは分かっている。だがこの男権現坂、如何なる魔術をも打ち破ってみせる！

俺のターン、ドロー！

手札から《超重武者装留ダブル・ホーン》の効果を発動！ このモンスターをビッグベン―Kケイに装備する！

両肩に巨大な角を持つ鎧が出現する。

鎧は中心で二つに分かれ、挟み込むようにビッグベン―Kケイに装着された。

「ダブル・ホーンを装備した《超重武者》は2回攻撃できる！

行け、ビッグベン―Kケイ！ 《サイレント・マジシャンLV8》を攻撃
！」

刺叉、盾、鎧。重装備で身を固めたビッグベン―Kケイが、もう一度地割れを起こす。

しかし、それが直撃することはない。

「速攻魔法発動！ 《テイメンション・マジック》！

自分フィールドのモンスターを一体墓地に送り、手札から魔法使い族を特殊召喚する！

《サイレント・マジシャンLV8》を墓地へ！ そして召喚するのは、《レモン・マジシャン・ガール》！」

沈黙の魔術師は風に包まれた後消失し、代わりに魔術師が前に立つ。

眩しい金の髪と、レモンをイメージさせる黄色の衣装。背中には天使のような白い羽根の装飾。

そんな女の子が、ちろりと赤い舌を出してウインクする。

「ぬう―そのような女子おなごでは、俺のビッグベン―Kケイは倒せんぞ！」

「違うよ。ボクの狙いはもう一体の方、《超重武者ワカ―O2》！」
「なにっ!？」

「《テイメンション・マジック》の効果発動！ 特殊召喚した後、相手モンスター一体を破壊する！」

《レモン・マジシャン・ガール》は空中から黄色の杖を出現させ、一発の光弾を放つ。

着弾し、爆発。狙い通り、《超重武者ワカ―O2》は破壊された。

「ビッグベン―Kではなくワカ―O2だと……何故だ」

「そんなに難しいことじゃないよ。ワカ―O2は戦闘で破壊されない効果を持っていたから、優先して破壊したんだ」

「ほう。それはつまり、ビッグベン―Kは破壊できるということか？」

「それはまだ分からない。権現坂くんの対応次第だよ」

言葉の裏で挑発する。『不動のデュエル』の力を見せてみる、と。

《超重武者装留ダブル・ホーン》を装備したビッグベン―Kは、このターン2回攻撃を行うことができる。

守備力4700の2回攻撃。対して《レモン・マジシャン・ガール》の攻撃力は800。彼女を守りきれなければボクの負けだ。

「――ふ。いいだろう。その挑発、買わせてもらう！」

行け、ビッグベン―K！ 《レモン・マジシャン・ガール》に攻撃！

ビッグベン―Kは装備した緑の盾を地面に叩きつけ、強烈な衝撃波を発生させた。攻撃は《レモン・マジシャン・ガール》へ一直線。

しかしここで、マジシャンガールズ特有の効果が発動する！

《レモン・マジシャン・ガール》の効果発動！ 攻撃対象になった時、手札から効果が無効にして魔法使い族を特殊召喚する！

ボクは、《ブラック・マジシャン・ガール》を特殊召喚！

黒魔術の弟子を喚ぶ。

青い衣装を纏った少女がレモンの前に立ち、戦闘を続行する。

「更に、攻撃してきたモンスターの攻撃力を半分にし、特殊召喚したモンスターと強制的にバトルさせる！」

レモンが光弾を放つ。

光弾はビッグベン―Kにヒットし、その攻撃力を半減――

「無駄だ！

忘れたか。ビッグベン―Kは守備力を使って攻撃する！

故にこそ、いくら攻撃力を下げても無意味！ 俺の不動の心は、その程度で揺らぎはせん！」

「――ううん。それは分かっているよ」

「な……？」

そう、マジシャンガールズが半減させるのはあくまで攻撃力。守備力を使って攻撃してくる彼のモンスターには一切通用しない。

だからこそ、この伏せカードがある。

魔法、罠を使わない。その信念は凄いと思う。

でもね。使わないのと使えないのでは、天と地ほども違うんだ。

——罠発動！ 《反転世界》！

このカードは、フィールドに存在する全ての効果モンスターの攻守を入れ替える！」

「攻守を入れ替えるだど!?!」

「ビッグベン—Kの攻撃力は1000。半減した今は500。つまりその数値が、ビッグベン—Kにとっての守備力となる！」

迎え撃て、《ブラック・マジシャン・ガール》！

『黒・魔・導・爆・裂・波』！

少女は青い杖を振るい、赤い球体を撃ち放った。球体は衝撃波を撥ね退け、そのままビッグベン—K目掛けて一直線に突き進む。

ビッグベン—Kは盾を構えた。しかし、貫通する。鎧もまた破壊され、やがて機械の武士は跡形もなく吹き飛んだ。

権現坂

LP：4000 ↓ LP：2800

権現坂くんのライフが減少する。

本来守備表示のモンスターを破壊しても戦闘ダメージは発生しないのだが、《超重武者》モンスターは別のようなのだ。

「くっ……グレートウォールの効果は攻撃対象にされた時のみ発動できる。攻撃を仕掛けたのはこちら側。破壊は免れなんだか。

——見事だ、武藤遊戯殿」

嫌味のない、純粹な賛美が向けられる。

それは相手の力を認め、同時に彼自身の至らなさを認めてのものだった。

「使わないのと使えないのでは、天と地ほどに違う」

確かにその通りだ。どうやら俺は無意識の内に、魔法と罠による連携を軽んじていたらしい。

だが、まだ勝負は分らない。このターン、俺にはまだ通常召喚が残っている。

手札からモンスターを裏守備表示で場に出し、ターンエンドだ」
「ボクのターン、ドロー！」

カードを引く。手札は2枚。

その中から、最初のターンで手札に加えたマジシャンガールを召喚する。

「ボクは、《チョコ・マジシャン・ガール》を攻撃表示で召喚！」

悪魔の翼の装飾、チョコレートを連想させる黒の衣装。少女は緑の髪を払った後、短めの杖を構えた。

権現坂くんのフィールドにはモンスターが1体のみ。

今こそ好機。バトルフェイズに移行し、命令を出す。

「バトル！ まずは《ブラック・マジシャン・ガール》で守備モンスターを攻撃！ 『黒・魔・導・爆・裂・波』！」

《超重武者》の守備力を警戒し、最も攻撃力の高い《ブラック・マジシャン・ガール》で攻撃を仕掛ける。

彼女は杖を振るって魔導弾を放ち、直後、裏側表示のカードを貫いた。

「この瞬間、《超重武者装留イワトオシ》の効果発動！」

このカードがフィールドから墓地に送られた時、デッキからイワトオシ以外の《超重武者》を手札に加える！」

「まだボクの攻撃は残ってるよ！ 《チョコ・マジシャン・ガール》、権現坂くんにダイレクトアタック！」

追撃の命令を下すと《チョコ・マジシャン・ガール》は黒い杖を振るい、一発の光弾を放った。

権現坂くんを守るモンスターはなく、故に、その攻撃は彼自身へ向かう。

——直撃。ライフダメージが発生する。

権現坂

LP：2800 ↓ LP：1200

「くっ……効いたぞ。だがダメージを受けたことにより、手札の《超重

武者ココロガマーA《》の効果を発動！ 手札からこのモンスターを特殊召喚する！

「現れる！ 《超重武者ココロガマーA》！」

ダメージを与えた直後、刺叉を手にした緑の《超重武者》が立ち上がった。

守備力は2100。一人一人の攻撃力が低いマジシヤンガール達では突破できない。

……これが《マジシヤン・ガール》の弱点だ。

搦め手に特化している分、純粋な攻撃力が低い。守備力2000を超える壁モンスターを召喚されただけで攻めきれなくなる。

彼はそれを見切って、イワトオシの効果でこれを手札に加えたのか。

「……このターンのバトルフェイズを終了するよ。」

《レモン・マジシヤン・ガール》を守備表示に変更して、ターンエンド

「俺のターン、ドロー！」

権現坂くんはカードを引き、そして――

「――来たか」

――ニヤリ、と笑った。

「武藤遊戯殿。ビッグベン―Kを倒した手腕、実に見事だった。」

だが、本当の勝負はここからだ。ここからは俺が手に入れた、新たな不動のデュエルをお見せしよう。

俺は手札から《超重武者ビッグワラ―G》の効果を発動！ 自分の墓地に魔法・罫カードが存在しない場合、手札から特殊召喚できる！

権現坂くんのフィールドに金色の《超重武者》が召喚される。

しかし、これまで登場したそれらとは明らかに違っていた。

武器がない。足がない。ステータスこそあるものの、外見的には戦いに向いているとは思えない。

「更に、手札から《超重武者ホラガ―E》の効果発動！ このカードも

ビッグワラーG同様、墓地に魔法・罾が存在しない場合、特殊召喚で
きる！」

続いて召喚されたのは、法螺貝の笛を持つ小さな武者。

確か法螺貝は戦国時代において、軍の進退の際に使われた笛だ。こ
ごぞというタイミングを見極め、笛を吹く。同時に、自軍の武士達が
突撃する。

権現坂くんがこれを召喚したのは、つまり、そういうことだろう。

——シンクロ召喚。

融合召喚ならば《融合》を。儀式召喚ならば《儀式魔法》を。

この基準がシンクロ召喚にも適用されるのならば、この法螺貝のモ
ンスターこそ鍵。

「行くぞ！」

レベル3のココロガマーAと、レベル5のビッグワラーGに、レベ
ル2のホラガーEをチューニング！」

「チューニング!？」

法螺貝の音が鳴り響き、笛を持った武者が二つの光輪に変換され
た。

その中心を、2体の《超重武者》が突き抜ける。

「荒ぶる神よ！ 千の刃の咆哮と共に、砂塵渦巻く戦場に現れよ！」

シンクロ召喚！ いざ出陣！ レベル10、《超重荒神スサノオ》
！」

——そうして、彼の切り札は現れた。

《超重荒神スサノオ》。巨大な薙刀を手にした機械の武者は、権現
坂くんの背後に胡座をかいて座した。

……これがシンクロ召喚というものか。

レベル3、レベル5、レベル2。合計レベルは10。

素材となるモンスター達のレベルを合計し、条件にあったモンス
ターをエクストラデッキから召喚する——。

「スサノオの効果発動！ 自分の墓地に魔法・罾カードが存在し
ない場合、一ターンに一度、相手の墓地から魔法か罾を一枚、自分の
場に伏せることができる！」

俺は貴殿の墓地から罫^{トラップ}カード、《反転世界》^{リバーサル・ワールド}を頂く！」

「なっ——！」

権現坂くんのフィールドに、一枚の伏せカード^{リバース}がセットされた。

——《反転世界》^{リバーサル・ワールド}。ビッグベン—K^{ケイ}を倒す際に使った罫^{トラップ}。

これでもう攻守反転の奇策は通じない。《マジシャン・ガール》の連携は完全に封じられてしまった。

“相手のカードを奪う”。見た目の豪胆さに対して、能力は非常にトリッキーだ。確かにこれは新しい“不動のデュエル”と言えるかもしれない。

だが、従来の力強さが失われたわけでもない。守備力3800、ビッグベン—K^{ケイ}を更に上回る鉄壁の守り。それはプレイヤーを護る盾であり、巨大な矛でもある。

「スサノ—O^{オー}はビッグベン—K^{ケイ}同様、守備力を使って攻撃することができる！」

バトルだ！ 《超重荒神スサノ—O^{オー}》で《ブラック・マジシャン・ガール》を攻撃！ 『クサナギソード・斬』^{ZAN}！」

薙刀による一閃。

豪快にして正確無比な刃は、瞬時に、息つく間もなく《ブラック・マジシャン・ガール》を捉えた。

剣戟を受けた少女は悲鳴と共に、硝子片となって散っていった。

遊戯

LP：2800 ↓ LP：700

「ターンエンドだ。

どうだ。これがシンクロによって進化した我が“不動のデュエル”^{デュエリスト}。貴殿が如何程の決闘者であろうと、これを打ち破ることはできない」

「いや。それはまだ分からないよ」

巨山の如くそびえる武者を睨む。

手札は一枚。フィールドには《マジシャン・ガール》が2体。彼が操る《超重武者》は守備力を使って攻撃を行うため、彼女達の能力は意味を成さない。

今の自分にあれを倒す手立てはない。

そう——“今”の自分には。

「ボクのターン！ ドロー！」

引いたのは魔法使い族、《ブラック・マジシャン》。

……違う。これじゃない。

エースモンスターではあるけれど、この状況を打破できるカードではない。

「ボクは、《チョコ・マジシャン・ガール》の効果を発動！ 手札の魔法使い族を1体墓地に送り、デッキから一枚ドローする！」

《ブラック・マジシャン》を墓地へ送り、再びカードを引く。

——それでも駄目だった。

キーカードを引き当てることができない。

……仕方ない、ここは耐えるのみだ。魔術師達の力を信じて、チャンスを待つ。

「《チョコ・マジシャン・ガール》を守備表示に変更して、ターンエンド」

「万策尽きたようだな。このまま一気に決めさせてもらう！ 俺のターン！」

俺は《超重武者テンB-N》を召喚！」

権現坂くんはドロウしたカードを確認し、それをそのまま召喚した。

二つのたらいを天秤のように担ぐ武者。装甲はココロガマーAと同じく緑。

「《テンB-N》の効果発動！ このモンスターを召喚・特殊召喚した時、墓地からレベル4以下の《超重武者》を1体、守備表示で特殊召喚できる！」

これにより、《超重武者ホラガーE》を特殊召喚！」

片方のたらいから、1体のモンスターが現れる。

法螺貝を持つ武者。先程、《超重荒神サノーO》の素材として使われたモンスターだ。

ならば彼の狙いは、二度目のシンクロ召喚か——！

「レベル4の《超重武者テンビーN》に、レベル2の《超重武者ホラガ―E》をチューニング！」

雄叫び上げよ、神々しき鬼よ！ 見参せよ、砂塵渦巻く戦場に！

シンクロ召喚！ いざ出陣！ レベル6、《超重神鬼シュテンドウ―G》！

《超重荒神スサノ―O》より一回り小さく、それでもなお巨大な《超重武者》が召喚される。

装甲は赤。巨大な金棒を地面に打ち付け胡座をかく様子は、赤鬼と称するに相応しい。

「これが、二体目のシンクロモンスター……！」

守備力2500と3800。《超重武者》の場合は、これがそのまま攻撃力となる。

見たことがないモンスター。見たことがない召喚法。

気分が高揚する。危機的状况ではあるが、だからこそ。

だからこそ、楽しい。

だからこそ、胸が躍るのだ。

敵が強大であればあるほど、それを突破した時のカタルシスはより大きくなる。

「バトルだ！」

まずはシュテンドウ―Gで、《チョコ・マジシャン・ガール》を攻撃！

「攻撃対象になったこの瞬間、《チョコ・マジシャン・ガール》の効果を発動！ 墓地から魔法使い族モンスターを特殊召喚し、攻撃対象を移し替える！ その際、攻撃する相手モンスターの攻撃力は半分になる！」

「だが、シュテンドウ―Gは守備力で攻撃を行う。半減しても無意味！」

「だけど、攻撃対象は変えられる。

ボクは墓地から《ベリー・マジシャン・ガール》を攻撃表示で特殊召喚し、シュテンドウ―Gとバトルを行う！」

「攻撃表示だど?!」

《チョコ・マジシャン・ガール》が杖を振るった瞬間、何もなかった空間に《ベリー・マジシャン・ガール》が出現する。

この瞬間、攻撃対象は変更される。

「そして、《ベリー・マジシャン・ガール》の効果発動！ このカードが攻撃対象になった時、自身の表示形式を変更して、デッキから《マジシャン・ガール》を喚ぶことができる！」

これにより、《アップル・マジシャン・ガール》を守備表示で特殊召喚！」

ベリー、レモン、チョコに続いて、4人目の《マジシャン・ガール》を喚ぶ。

漆のように黒い髪、林檎のように赤い衣装。背中にはレモン同様の翼の装飾。ただし、こちらは杖を持たない。その代わり、衣装の腕部分が籠手のように太くなっている。

《ベリー・マジシャン・ガール》の効果はここまで。他の《マジシャン・ガール》のように攻撃対象を変更したり、攻撃力を半減させたりする効果はない。

シュテンドウ—G^ジは金棒での《ベリー・マジシャン・ガール》の頭をコツンと叩き、破壊した。

「上手く躲したか。だがこちらには、まだスサノ—O^オの攻撃が残っている！」

スサノ—O^オでもう一度《チョコ・マジシャン・ガール》を攻撃！
『クサナギソード・斬^{ZAN}』！」

再度、薙刀が振るわれる。

《チョコ・マジシャン・ガール》の効果は一ターンに一度しか発動できない。彼女はスサノ—O^オの攻撃に対応しきれず、斬撃を受けて消滅した。

……徐々に追い詰められつつある。

残っているのは《アップル・マジシャン・ガール》と《レモン・マジシャン・ガール》の2体。どちらも攻撃対象になった時、手札から代わりの魔法使い族を特殊召喚し、バトルさせる効果を持つ。

——だから、ここが限界。

手札は2枚あるけど、どちらも魔法使い族ではない。

権現坂くんのフィールドには攻守の値を入れ替える《リバーサル・ワールド反転世界》が伏せられている。

次のターン、2体のシンクロモンスターで《マジシャン・ガール》達を退け、攻撃力か守備力が1000以上のモンスターで攻撃されれば、ボクの負け。

付け加えると、彼は魔法・罫マジック・トラップカードを使わない。つまり、モンスターを引き当てる確率は100パーセント。

実質次が、自分にとつてのラストターンとなる。

「俺はこれでターンエンドだ」

「ボクのターン——ドロー！」

——終わりの時は来た。

引いたのは待ち望んでいたカード。

全てを壊す。全てを破壊する。

これは、そんな攻撃性の塊のようなカードだ。

「ボクは2体の魔術師の力を使い、このモンスターを召喚する！」

黒金の暴竜よ！ 次元の狭間を閉ざす鎖状を破り、我が敵に滅びを

もたらせ！

現れる！ 《破滅竜ガンドラX》クロス！

《マジシャン・ガール》達を贄として、漆黒の竜が降臨する。

強靱な肉体と、禍々しい紅い瞳。全身には幾つもの光点があり、黒金の四肢がそれらを一層際立たせる。

「な……なんだ、これは」

権現坂くんが後ずさりする。

風向きの変化を感じた。一方的だった空気の流れは、1体の竜の出現により逆流する。

——竜に命令を下す。破壊せよ、と。

「ガンドラXクロスの特殊効果発動！」

このカード以外のモンスターを全て破壊し、その中で最も攻撃力が高いモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「なんだと……!?!」

「スサノー^オの攻撃力は2400！ よって権現坂くん！ 君に2400のダメージを与える！」

行け、ガンドラ^{クロス}X！ 『破滅竜の閃光』！」

胸部の紅のコアが輝いた後、黒竜は曇天を仰ぎ咆哮した。

熱線が放たれる。全身の光点一つ一つから無差別に、理不尽に、破壊が撒き散らされた。

スサノー^オを貫き、シユテンドウ^{ジー}Gを貫く。フィールドは一瞬にして無に還り、その余波が権現坂くんに叩きつけられた。

「うおおおおああああ——！！！」

権現坂

LP：1200 ↓ LP：0

——決着する。勝者、武藤遊戯。

権現坂くんがこのまま押し切る——誰もがそう予想したであろう展開を一枚で覆し、勝利をもぎ取った。

融合使い、紫雲院素良！

「……無念。完敗だ、武藤遊戯殿」

アクションフィールドが消えた後、権現坂くんは微笑を浮かべながらそう言った。

全ての力を出し切り、その上で負けた。今の彼はそんな顔をしていた。

「権現坂くん……ありがとう。とても楽しいデュエルだったよ」

「札を言うのはこちらの方だ。貴殿とのデュエルで世界の広さを教えられた。

魔術師による「柔」の連携と、ドラゴンによる「剛」の威力。

それに加えてまさか、俺に合わせてAカードを使わないとはな

「あっ………そういえば」

言われてようやく思い出した。

今回のデュエルでは、お互いにAカードを一枚も使っていない。

シンクロ召喚を見た辺りからすっかり忘れてしまっていた。

まあ、結果論から言えば使わなくて正解だったかもしれない。権現

坂くんの切り札である《超重荒神スサノ^{オー}》は、こちらが魔法・罠を使えば使うほど真価を發揮するからだ。

「ん？ 『そういえば』とはどういうことだ？ 遊戯殿は俺に合わせて

アクション
Aカードを使わなかったのではないのか？」

「いやー………恥ずかしい話なんだけど、使うのを忘れていたんだ。デュエルに熱中していて」

「熱中していたのならそれこそおかしいだろう。俺が言うのもなんだが、アクションデュエルはAカードを使つてこそそのデュエルだぞ？」

「えっと、それは………そう！ 実はボク、ずっと遠くからこの街に来たんだ。だから、まだアクションデュエルに慣れてないんだよ」

「そうなのか。素良と同じことを言うのだな」

咄嗟に誤魔化してしまったが、一応間違いは言っていないはずだ。

……実は異次元からやってきました、なんて言っても普通は信じないだろうなあ。

「お疲れ様！ 権現坂くん、遊戯くん！」

塾長さんがやってきて、自分達に労いの言葉をかける。

「塾長殿……申し訳ない。遊勝塾の二番手を任されておきながら、結果はご覧の通りだ」

「いや、遊戯くんの強さは本物だ。権現坂くんはよくやったよ。

とはいえ、これで遊勝塾の二連敗か。経験の差があるとはいえ、ここまで一方的だと流石に悔しいな。

そこで遊戯くん。ここで一つ、頼みを聞いてもらえないだろうか？」

「頼み？」

「ああ。ほら、あの子が見えるか？」

塾長が指したのは青髪の少年。口に棒つきのキャンディを含みながら、硝子越しに自分を見ている。

「彼は紫雲院素良って言うんだけどな。君とどうしてもデュエルがしたいって言い出したんだ。

ただ……彼は融合召喚の使い手なんだ。エクシーズ召喚を使っているところは見たことないから、遊戯くんの友達の要望には答えられない。

だが、俺は生徒の意思を尊重したい。素良がデュエルしたいと言うのなら、できる限り叶えてやりたいんだ。

「どうだろう遊戯くん。彼の挑戦を受けてもらえないか？」

「そうですね……」

「ゴーストに手を当て、耳を澄ます。

……どうやら、あちらとの通信は切られてるらしい。海馬くんからの応答はない。

……特に指示は受けていないけど、一回くらいなら大丈夫だろう。「わかりました。挑戦を受けます」

「な……いいのか？ 君には彼とデュエルする理由はないんだぞ？」

「決闘者がデュエルするのに大した理由は要りませんよ。」

それに、ここで終わるのも中途半端で後味悪いですから。ここまで来たらもう一度勝って、三連覇を成し遂げてみせますよ」

「おっ、言ったな！ 素良はこの塾のトップ3の一人。そう簡単に勝てるとは思わないことだ。」

じゃあ、素良を呼んでくる。遊戯くんは先に準備していてくれ」

塾長さんは静かに闘志を燃やしながら、観客席に戻っていった。

「次は素良とのデュエルか。ますます目が離せないな。しかし、本当によかったのか？」

「？ よかったって、何が？」

「これは俺の勝手な推測なのだが……遊戯殿は体力に自信がないのではないか？」

「体力？ 確かにその通りだけど……—あつ」

しまった。〃そのこと〃を失念していた。

一戦目の遊矢くんに続き、二戦目の権現坂くん。となれば、次の三戦目も間違いなく——。

「うむ、次もまたアクションデュエルだ。おそらく素良はAアクションカードを駆使して戦うだろう。遊戯殿にとっては体力的に苦しい戦いになるかもしれない。」

だが一人の決闘者デュエリストとして、素良の気持ちは分からんでもない。少々酷かもしれないが、どうか期待に応えてやってほしい」



「——と、いうわけで。改めて自己紹介するよ。」

僕の名前は紫雲院素良。好きなものはお菓子！ 特技は融合！

よろしくね！」

「うん、よろしくね」

デュエルフィールドに着くやいなや、青い髪の男の子——紫雲院素良〃くんは元気よく自己紹介した。

年相応の陽気さが何とも可愛らしい。この後のアクションデュエルでも活発に動き回ってくれるだろう。

……正直そろそろ休みたいのだが、ここは頑張らねばなるまい。

「ありがとう、武藤遊戯さん。僕の挑戦に応じてくれて。

でも大丈夫？ 失礼かもしれないけど、遊戯さん体力ないんでしょ？」

「いや、そんな。確かに体力には自信ないけど、まだまだ君には負けないよ」

まるで年寄りのような自分の発言に少し凹む。

けれど、今回の相手は前二人よりも幼い子供だ。素良くんには申し訳ないが、少しは楽なデュエルになるはず——

「あ。もしかして、僕が子供だからって油断してる？」

「うゝっ——」

つい、と目を逸らす。

心の中を読まれた気分だった。

「やっぱりねー。なんとなくそうは思ってたんだ。この人、実は本気で戦ってないんじゃないかなって」

「いやいや、そんな失礼なこととはしてないよ」

「だったらいいけどね……」

そう言いながら素良くんは一瞬だけ目を細めた。

——その瞬間だけ、彼の「素」が見えた。

敵視……というのは行き過ぎだが、素良くんはボクを怪しんでいる。表面上は明るく振舞っているが、どうも彼には警戒されているらしい。

無理もないことか。何もなかったところからいきなり人が現れたら誰だってそうする。一度デュエルしただけで分かり合えた二人と塾長がお人好しすぎるだけで、彼の反応こそが普通なのだ。

「まあいいや。デュエルしてみれば分かることだし。

それじゃ、よろしく願いしまーす」

素良くんは行儀よく礼をした後、所定位置についた。彼は新しい鉢玉を加えた後、デュエルディスクを展開する。

「それじゃあ塾長、おねがいー！」

「了解だ素良！　じゃあ行くぞ！　アクションフィールド、オン！
《スウィーツ・アイランド》！」

三度、天井に備え付けられた機械が稼働する。
簡素な風景は瞬く間に幻想の世界へ。人物はそのまま背景だけ
が変化し、質量を伴った映像が付与される。

展開されたのは《スウィーツ・アイランド》。

ビスケットの家、ドーナツのアーチ、ソフトクリームタワー。童
話に出てくるお菓子の世界をそのまま再現したような、メルヘンチツ
クな世界だった。

「うん、やっぱりいいよねここ。《スウィーツ・アイランド》。僕の好き
なお菓子がいっぱいだ」

「じゃあ、行つくよー！　戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が！」

「モンスターと共に地を蹴り、宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ、これぞデュエルの最強進化系！」

「アクション——！」

「デュエル！」

◆
掛け声と同時、青空を背景に無数の^{アクション}Aカードが弾け飛んだ。
それはアクションデュエル開始の合図。遊勝塾三戦目、紫雲院素良
くんとデュエルの幕が上がった。

遊戯

LP：4000

素良

LP：4000

互いのライフが視覚化され、デュエルが開始される。

先行はこちら。今回は堅実に攻めさせてもらおう。

「ボクの先行！」

モンスターを裏守備表示でセット！ 更にカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「僕のターン、ドロロー！」

出し惜しみはなしだ。まずはこっちから行かせてもらうよ！

まず僕は永続魔法《ブランチ》を発動！ このカードがある状態で融合モンスターが破壊された時、その素材に使われたモンスターを墓地から特殊召喚できる。

そして、魔法カード《融合》^{マジック}を発動！ これにより、手札の《ファーマル・ベア》、《エッジインプ・シザー》を融合！

悪魔の爪よ！ 野獣の牙よ！ 神秘の渦で一つとなりて、新たな力と姿を見せよ！

——融合召喚！

現れ出ちやえ、すべてを切り裂く戦慄のケダモノ！ 《デストロイ・シザー・ベア》！

天使の翼が生えた、つぶらな瞳の熊のぬいぐるみ。悪魔の目が垣間見える巨大なハサミ。正反対とも言える二体が融合し、融合モンスターが召喚された。

関節がハサミでできた熊のぬいぐるみ。ただし眼球は飛び出ており、口と腹が裂けている。口の中からは悪魔の瞳が覗き、腹からは巨大なハサミが突き出していた。

「このままバトルだ！ 《デストロイ・シザー・ベア》で、守備表示のモンスターを攻撃！」

攻撃対象にされたことで、裏側表示のカードが表になる。

それは《マシユマロン》。名前の通り、お菓子のマシユマロをそのままモンスター化したようなカードだ。

《デストロイ・シザー・ベア》のアイアンクローが《マシユマロン》を抉る……が、弾力性に優れたその身体を裂き切れず、押し返された。「あれ、破壊できない？」

「君が攻撃した《マシユマロン》は、戦闘では破壊されない効果を持つ。

更に、裏側表示のこのカードを攻撃したプレイヤーに1000ポイントのダメージを与える」

「むう……」

素良

LP4000 ↓ LP:3000

「惜しかったな。てつきり遊矢とのデュエルで出したあのモンスターだと思ったんだけど。」

まあいいや。僕はこれでターンエンド」

「ボクのターン、ドロー！」

ボクは《マシユマロン》の力を使い、《サイレント・ソードマンLV5》を召喚する」

《マシユマロン》を消滅させ、新たなモンスターを召喚する。

身の丈ほどの白い大剣を背負った、細身の男性剣士。彼は青いコートを靡かせ、武藤遊戯のフィールドに着地した。

攻撃力は2300。《デストロイ・シザー・ベアー》の2200を上回っている。

「うわっ、まずい！」

素良くんは身を翻し、アクションAカードを探し始めた。

その身体能力は想像以上だった。壁を蹴って家の上にながった後、身軽に飛び回りカードを探す。

おそらく既に見つけている。確実にカウンターを決めるため、探している振りをしてながら攻撃を待っているのだ。

《サイレント・ソードマンLV5》と《デストロイ・シザー・ベアー》の攻撃力の差は100。更に《サイレント・ソードマンLV5》は、相手の魔法カードの効果を一切受け付けない。

これら二つを踏まえると、素良くんが狙っているのは《デストロイ・シザー・ベアー》を強化するカードだろう。

でも、それは甘い。

これまでの二連戦でアクションAカードの特性は大方把握している。拾ってすぐ使える即効性。

一ターンのみ、あるいは一度のみ適用される単発性。

そして、それらの多くは、フィールドのカード1枚のみを対象として発動する。

——対抗策はここに。

素良くんがカードを拾う前に、伏せカード^{リバース}を発動させる。

「バトルフェイズに入る前に、この伏せカード^{リバース}を発動する！」

速攻魔法、《禁じられた聖衣》！ モンスター1体の攻撃力を600

ポイントダウンさせ、効果による対象から外す！ これにより、《デス

トリー・シザー・ベアー》を対象としたAカード^{アクション}は無効となる！」

「ええっ!？」

《デストリー・シザー・ベアー》に白い聖衣が着せられ、攻撃力がダウン。

沈黙の剣士は大剣を振るい、その胴体を薙ぎ払う。

「《サイレント・ソードマンLV5^{レベル}》の攻撃！ 『沈黙の剣LV5^{レベル}！』」

——光芒一閃。

白い剣の光が尾を引き、ぬいぐるみのモンスターは両断された。

素良

LP：3000 ↓ LP：2300

「つ……でもここで、《ブランチ》の効果を発動！ シザー・ベアーの融合素材になったモンスター、《エッジインプ・シザー》を特殊召喚！」
再び悪魔のハサミが素良くんのフィールドに出現する。

《ブランチ》は融合モンスターが破壊された時の保険のカード。素良くんはきつと次のターン、蘇生させた《エッジインプ・シザー》を使って何かを仕掛けてくるだろう。

「ボクは、カードを一枚伏せてターンエンド」

これでセットしてあるカードは二枚。その内一枚は発動できるタイミングが限られている。これだけでは少々不安だ。

ターンを終えた後、自分もまたAカード^{アクション}を探し始める。

同じAカード^{アクション}を狙っても勝ち目はない。であれば、探すべきは反対方向か。

「Aカードを使う気だね。でも、それだけじゃ僕の反撃は防ぎきれないよ！」

僕のターン！ 魔法カード《融合回収》を発動！ 墓地から《融合》と、融合素材に使われたモンスター1体を手札に加える！」
素良くんは自分の墓地から《融合》と《ファーニマル・ベア》の2枚を指で挟み、こちらに見せた。

……これで彼の準備は整った。もう一度、融合召喚が来る。

「そして魔法カード、《融合》を再び発動！ 僕はもう一度《ファーニマル・ベア》、《エッジインプ・シザー》を融合する！」

「悪魔の爪よ！ 野獣の牙よ！ 神秘の渦で一つとなりて、新たな力と姿を見せよ！」

——融合召喚！ 現れ出ちゃえ、すべてを引き裂く密林の魔獣！

《デストロイ・シザー・タイガー》！」

同じ融合素材で異なるモンスターが召喚された。名称は《デストロイ・シザー・タイガー》。《デストロイ・シザー・ベア》の“熊”部分をそのまま“虎”にしたようなモンスターだ。

「《デストロイ・シザー・タイガー》の効果発動！ 融合召喚に成功した時、素材にしたモンスターの数だけフィールドのカードを破壊できる！」

素材になったのは2体！ よって僕は《サイレント・ソードマンLV5》と、伏せカードを一枚破壊する！」

《デストロイ・シザー・タイガー》の腹部のハサミが大きく開いた。刃を光らせながら、《サイレント・ソードマンLV5》を切り刻むべく接近する。

——が、その前に。

チョコレートレンガに挟まれたAカードを取る。即座に確認、そして発動させた。

「A魔法、《ミラー・バリア》！ フィールドのモンスター1体はこのターン、カードの効果では破壊されない！ ボクは《サイレント・ソードマンLV5》を選択！」

その直後、シザー・タイガーのハサミが閉じられた。

対象は二枚。成功したのは一枚だけ。

破壊されたのは罠カード——《運命の発掘》。

「この瞬間、破壊された《運命の発掘》の効果が発動！ 相手の効果によつてこのカードが破壊された時、自分の墓地の《運命の発掘》の数だけデッキからドロウする！」

ボクの墓地には一枚だけ。よつて、一枚ドロウする」

《サイレント・ソードマンLV5》^{レベル}は多面体のバリアに覆われており、シザー・タイガーの凶刃^{リバース}を防いでいた。

モンスターは守られ、伏せカードはドロウカードに変換。実質シザー・タイガーの効果は無効化したと言つていい。

「流石、遊矢と権ちゃんを倒しただけのことはあるね！」

だったら僕は、手札から装備魔法《フュージョン・ウエポン》を発動！ これを《デストロイ・シザー・タイガー》に装備！ 攻撃力を1500ポイントアップさせる！」

更にシザー・タイガーは、自分の場の《ファーニマル》または《デストロイ》1体につき、《デストロイ》達の攻撃力を300アップさせる！

よつて、シザー・タイガーの攻撃力は合計1800アップする！」

《デストロイ・シザー・タイガー》の攻撃力が跳ね上がる。数値は3700、《サイレント・ソードマンLV5》^{レベル}より1400も上回った。手札を確認する。

《運命の発掘》でドロウした魔法カード^{マジック}。

2体の攻撃力の差は1400。

—— だったら、覆せる。

「バトルだ！ 《デストロイ・シザー・タイガー》で《サイレント・ソードマンLV5》^{レベル}を攻撃！」

「罨^{トラップ}発動！ 《和睦の使者》！ このターン、ボクのモンスターは戦闘で破壊されず、戦闘ダメージも受けない！」

《デストロイ・シザー・タイガー》が襲いかかってくる直前に罨^{トラップ}を発動させ、攻撃を中止させる。

「む……ターンエンド、だよ」

「ボクのターン、ドロロー！」

ボクは《沈黙の魔導剣士―サイレント・パラディン》を召喚！」

青い刀身の西洋剣と、聖騎士風の盾を持った魔導剣士。サイレント・ソードマンが青ならこちらは白。括られた栗色の髪が純白のマントによく映える。

魔導剣士は剣士と並び立ち、玩具の悪魔を見据えた。

「サイレント・パラディンの特殊効果発動！ このカードの召喚に成功した時、デッキから《サイレント・ソードマンLV3》^{レベル}を手札に加える！」

そして次。ドローフエイズに引いたカードを選ぶ。

元々、このターンで《テストイー・シザー・タイガー》を倒すことはできた。でも、このカードならその先へ行ける。

「ボクは、《サイレント・ソードマンLV5》^{レベル}の力を使い——いだよ！」

《沈黙の剣士—サイレント・ソードマン》！」

沈黙の剣士を生贄とし、新たな沈黙の剣士を召喚。

身の丈ほどの白い大剣と、ブルーのロングコート。外見にそう大きな違いは見られない。強いて言うなら腕部、腰部に銀のベルトが加わった程度だ。

しかし、攻撃力は僅か1000のみ。《サイレント・ソードマンLV5》^{レベル}から目に見えて弱体化している。

「攻撃力1000？ わざわざ自分で攻撃力を下げるなんて、どういうつもり？」

「その答えはすぐに分かるよ。」

行くよ素良くん！ 《沈黙の剣士—サイレント・ソードマン》で、《テストイー・シザー・タイガー》を攻撃！」

攻撃命令を受け、沈黙の剣士はシザー・タイガー目掛けて跳躍した。己の背丈ほどある大剣を片手で振るい、標的を叩き切る。

——しかし、それは通らない。光芒が停止する。

剣士による渾身の斬撃は、白刃取りの要領で玩具の腕に止められていた。直後、悪魔のハサミが開く。剣士はその胴体を切り刻まれ、無残に破壊された。

遺された大剣は垂直に落下し、地面に突き刺さる。

遊戯

LP：4000 ↓ LP：1300

「……どういうこと？ もしかしてヤケになっちゃった？ それとも、手加減のつもりなのかな？」

「そんなことはないよ。ボクの攻撃はここからだ！」

《沈黙の剣士—サイレント・ソードマン》は破壊された時、手札かデッキから《サイレント・ソードマン》モンスターを、召喚条件を無視して特殊召喚できる！

時を超えて現れる！ 《サイレント・ソードマンLV7》！

——不屈の闘志を以て、沈黙の剣士が復活する。

粒子が身体を再構築し、遺された大剣は再び握られる。

攻撃力は2800。一度の敗北を経て、剣士は悪魔を上回った。

「《サイレント・ソードマンLV7》！ もう一度、《アストロイ・シザー・タイガー》を攻撃！」

「っ——本当にヤケになっちゃったの？ 《アストロイ・シザー・タイ

ガー》の方が攻撃力は上だよ！」

「《サイレント・ソードマンLV7》は、フィールドの魔法カードの効果果を全て無効にする！」

よってA アクション カードは勿論、君の《フュージョン・ウエポン》と《ブランチ》の効果も無効となる！」

「何っ……！」

ただし、ここに例外がある。

残された一枚を発動させ、《サイレント・ソードマンLV7》を強化する。

「速攻魔法、《沈黙の剣》！」

このカードの発動と効果は無効にされず、《サイレント・ソードマン》の攻撃力と守備力を1500アップさせる！」

攻撃力上昇——4300。

剣士は剣を構え、玩具目掛けて跳躍する。

「《サイレント・ソードマンLV7》の攻撃！ 『沈黙の剣LV7』！」

——光芒一閃。

虎の玩具を象った悪魔を、一刀の元に斬り伏せた。

素良

LP : 2300 ↓ LP : 200

「うっ——！」

《ブランチ》が無効化されている今、素材モンスターを復活させて盾にすることはできない。

そしてこちらにはまだ、彼女の攻撃が残っている。

「行け、サイレント・パラディン！ 素良くんをダイレクトアタック！

『沈黙の魔導剣』！」

「うわあっ!？」

魔の力を宿した西洋剣が、青い光芒を引いて素良くんを切り裂いた。

残り僅かだったライフが削れ、0となる。

素良

LP : 200 ↓ LP : 0

それを合図にお菓子の世界は徐々に消滅していき、元の簡素な風景が戻ってきた。

デュエル終了。遊勝塾三戦目もまた、武藤遊戯の勝利で幕を閉じた。



「あはは、凄いねキミ！ まさかこの僕が負けちゃうなんてきー！」

素良くんは身を起こし、服についたホコリを払って立ち上がった。

「ここには融合を初めとして、シンクロやエクシーズにペンデュラム、それから儀式。とにかく色々な召喚法を使う決闘者デュエリストがいるんだ。

——でも、キミみたいなのは始めて見たよ。キミとのデュエルは融合とかペンデュラムとか、それ以前の戦いだった。

何気ないモンスターの召喚でも、ビリビリエネルギーを感じたよ。

基本からしてレベルが違うっていうか、むしろ基本のレベルこそが違うっていうか。

うん、とにかくありがとう。これはこれでいい経験になったよ」

「——ああ。実に、見事なデュエルだった」

——パチパチパチ。

柏手を叩きながら、その男は現れた。

群青の長袖と白のスラックス、赤いマフラー。赤い眼鏡をかけており、その奥からは鋭い瞳がこちらを覗く。

見たことのない人だ。少なくとも素良くとデュエルを始める前……どころか、遊勝塾に転移してきた時にはいなかった。

観客席の方を見る。そこには塾長さんを始めとした観客が7名全員が、目の前のこの男を警戒していた。

男は柏手を叩き、微笑を浮かべながらこちらに歩み寄る。

「はあ……誰かと思ったら、レオ・コーポレーションの社長じゃん」

素良くんは不信感を隠そうともせず、マフラーの男に話しかける。

「今更遊勝塾に何の用？ 宣戦布告でもしに来たの？」

「いや。今回は私一人でこの塾に来た。LDSは関係ないし、今更遊勝塾を乗っ取るつもりもない」

「ふーん、そう。でも悪いけど信じられないね。こう言ったら皆に悪いけど、遊勝塾はとて小さな塾だ。

『天下のLDSが、十人にも満たない小さな塾に引き分けた』。

僕らとしては鼻が高いけど、そっちからすればこの上ない汚点だ。これを返上するためにリベンジに来たって考える方が普通じゃない？」

「なるほど。確かに母様かあさまならそう仰るかもしれない。君たちは我々の再戦に備えておいた方がいいだろう。

しかし今回は別件だ。私が出があるのは——彼だ」

マフラーの男はこちらに向き直る。

そして人当たりの良い営業スマイルを浮かべながら、自己紹介をした。

「私は赤馬零児。レオ・デュエル・スクール、通称LDSを経営しているレオ・コーポレーションの社長を務めております。以後、お見知りおきを」

「武藤遊戯です。よろしくお願ひします」

「……丁寧にごつとも。」

——では、早速ですが本題に入らせていただきます。

武藤遊戯さん。この場で私とデュエルをしていただきたい」
「……………」

静かな宣戦布告。ただし、相手は遊勝塾ではなく自分。

素良くとデュエルを始める前、彼の姿はなかった。きっと、ボク達がデュエルをしている間に遊勝塾に訪れたのだろう。

ボクと素良くんのデュエルを見てこの人は——赤馬零児さんは、ボクとデュエルがしたいと思ったのか。

……いや、それはおかしい。

経験に裏付けされた直感がアラートを鳴らす。この男には、何か裏がある。

武藤遊戯は遊勝塾に突然現れた。にも関わらず、赤馬零児は自分と接触するためにここに来た。武藤遊戯という存在は、まだ遊勝塾以外には知られていないはずなのに。

——おかしいと感じたのはここだ。

この男は、どうやって自分の存在を知ったのだろうか……？

「ねえちよつと、勝手なこと言わないでくれる？ そんなこと塾長が許すワケないじゃん」

「話は既に通してある。本人は嫌がっていたが、教育のためと割り切つて了承してくれた。LDSのトップと、遊勝塾に三連勝したデュエリスト決闘者。この二人のデュエルなら、生徒達も多くのことがを学べるだろう、とな。」

それで、どうでしょうか。聞いた話によると、貴方は休みなく三度デュエルを受けたそうですね。四連戦が苦しいようでしたら、機会を改めますが」

「それは——」

「——望むところだ。そのデュエル、遊戯の代わりにこの俺が受けてやる」

「え………？」

——聞き覚えのある声が背後から届いた。

機械越しの電子の混ざった音ではなく、人から発せられた肉の声。振り返って確認する。

鋼のような白銀のコート。腕には自分と同じ型のデュエルディスプレイ。

いつの間にか自分の後ろには、「海馬瀬人」が腕を組んで立っていた。

「な——」

素良くんは驚きのあまり口を開け、加えていた飴を落とす。

……その気持ちは分からないでもない。実際に見ていないから確証はないけど、海馬くんはボクと同じように「突然」現れた。何もない場所から、ワープでもしてきたかのよう。

「フン……第二の実験もまた、成功のようだな」

海馬くんはグーとパーを繰り返して感触を確かめた後、満足げに笑う。

「第二の実験？」

「無論、今回の次元移動実験のことだ。

新型デュエルディスプレイを装着した一人目の決闘者^{デュエリスト}を他次元へ転送する。これが第一の実験。

そしてこれが第二の実験。一人目の反応をこちらでキャッチし、その座標に二人目を転送する。

つまり、貴様の自意識をビーコンにして俺もまたこちらに転移してきたというわけだ」

「——やはり、か」

赤馬零児は眼鏡の位置を直した後、海馬くんの方を見て意味深に微笑んだ。

——彼の目的が垣間見えた。

この男は初めから気づいていた。武藤遊戯がこの世界の人間ではないことを。そして、その上で接触を図りに来たのだ。

「ここまで足を運んだ甲斐はあったようだ。

役者は揃った。武藤遊戯。榊遊矢。そして——紫雲院素良」

「っ——！」

その一瞬でどんな駆け引きがあったのか、自分には分からない。
ただ——赤馬零児が素良くんを睨んだ瞬間、彼は豹変した。

素良くんは忌々しげに舌打ちした後、後方へ大きく跳んでデュエルディスクを構えた。お菓子好きな少年としての一面は鳴りを潜め、ただ殺気のみを赤馬零児にぶつけている。

「そう身構えるな、紫雲院素良。最初に言った通り、私の目的は武藤遊戯との接触だ。それ以外のことをするつもりはない」

「……ふーん。いいのかな、それで」

「この場で君を捕らえるのは簡単だが、それでこの塾からの信用を失うのは釣り合いが取れない。」

故に、今は見逃す。次に会う時までどちらの味方になるのかを決めておけ」

「っ——」

素良くんは悔しげにデュエルディスクを下ろした後、赤馬零児を睨む。

……それ以上のことは許されなかった。

この場において紫雲院素良は脇役。赤馬零児はそう断言したのだから。

「なるほどな。その小僧はいわばスパイ。貴様らとは敵対しているということか」

「仰る通りです。紫雲院素良の正体は“融合次元”と呼ばれる異次元から来た決闘者^{デュエリスト}。融合次元はこの“スタンダード次元”を初めとした全ての次元と敵対関係にあるのです。」

彼らはシンクロ次元、エクシーズ次元、スタンダード次元を侵略し、全てを手中に収めようとしている。奴らはいずれこの次元にも現れ、侵略を開始するでしょう。

私の目的は、スタンダード次元の人々を彼らから守ること。そのために、腕の立つ決闘者達^{デュエリスト}の協力が必要なのです」

「異次元の決闘者達による戦争——“次元戦争”の下準備のため、我々の力が必要ということか。」

——くだらん。実にくだらん妄言だ」

——くだらない。

海馬くんは、吐き捨てるようにそう言った。

「……くだらない、ですか」

「気に障ったか。だが撤回はせんぞ。」

この俺がわざわざこんな次元にまで足を運んだのは、我が海馬コーポレーションが思い描く未来のため。そして、その先にある俺自身の宿願を果たすためだ。

次元戦争などという非生産的な戦いに加担する気は毛頭ない」

「融合次元の目的は全ての次元を制圧することです。彼らを放置すればいずれスタンダードだけでなく、あなた方の次元にも侵略に来るでしょう。その時のために、我々と同盟を結んでおくべきでは？」

「その心配は必要ない。我々はここより遙か遠くの次元から跳んできた。それこそ、世界を構築する基盤からして異なる次元からだ。」

融合次元とやらが何者かは知らないが、奴らが我々の世界まで辿り着くことはない。万が一辿り着けたとしても、その時はこの俺自らが手を下すまで」

「……スタンダード次元と手を組むメリットがない、ということですか」

「そういうことだ。」

行くぞ遊戯。デュエルを受けてやろうかと思つたが……もうこの次元に用はない」

海馬くんは踵を返し、デュエルディスクを操作する。

『期待外れだった』

言葉にこそしなかつたが、そう言いたかつたであろうことは彼の背中から読み取れた。

今回の次元移動実験の最終的な目標は、異次元に住む決闘者達との^{デュエル}交流だ。異文化交流を通じて見聞を広め、互いの社会を発展させる。

しかしそのためには、互いの世界が平和であることが最低条件だ。でなければ自分達は、戦場に自ら顔を突っ込むことになってしまう。

……この世界はその条件に合わない。表面上は平和に見えても、裏側では戦争のための戦力を蓄えている。スタンダード次元と関わり

を持つてしまえば、遅かれ早かれボクらの町——「童実野町」もまた戦場になってしまうかもしれないのだ。

「——そうか。では仕方がない。」

こちらとしては避けたかったのだが、少々強引な手段を取らせてもらう」

「えっ……？」

赤馬零児は自前のデュエルディスクを腕に装着し、空に掲げた。

そして。

「アクション・フィールド擬似展開！ 《クロス・オーバー》！」

四度目の、アクション・フィールドの発動を宣言した。

その瞬間、世界に物質が付随される。

何もなかったはずの空間にクリアブルーの直方体が出現し、同時に上空で無数のカードが弾け飛んだ。

……しかし、それだけだった。

遊勝塾の三人とのデュエルでは別世界のように変わっていたが、これは元の運動場に足場を加えただけ。個性溢れるフィールドを三種類も体験した身としては、少々物足りない印象を受けた。

「……………」

一度だけ聞く。これはなんの冗談だ」

「熟考した上での苦肉の策です。」

「手を組むメリットがない」——このデュエルで、その考えを改めてもらいたい」

「この俺にアクションデュエルを体験させようということか。」

無駄なことを。その程度でこの俺を止められるとでも？」

「いいえ。あなた方はこのデュエルを受けざるを得ない。」

私が展開したこのフィールドはアクションデュエルをするためだけのものではない。中にいる決闘者デュエリストを決して逃がさない「結界」の役割も果たしているのです。つまりこの私を倒さない限り、あなた方は元の次元へは帰れない。

ですが、今回は特別です。私の目的はあなた方の認識を変えること。このデュエルを終えたら勝敗に関係なく結界は解除すると約束

「しましよう」

「必死だな。余程戦力が足りていないと見える」

「これが私の覚悟です。この次元の人々を守る。そのためなら恥も外聞も捨て、悪魔とも契約する。」

それに——私とのデュエルは、全くの無駄ではないと断言しまし
よう」

赤馬零児はデッキの一番上のカードを引き、それをこちらに見せ
た。

——《DDD死偉王ヘル・アーマゲドン》。

モンスターと魔法、二つの特性を併せ持つ特殊なカード。

彼が見せたのは、遊矢くんのそれとはまた違ったペンデュラムカー
ドだった。

「——フン、いいだろう。その挑戦、この海馬瀬人が受けて立つ」

海馬くんはつまらなそうに鼻を鳴らした後、デュエルディスクを展
開した。それに応じて、赤馬零児もまたソリッドビジョンのディスク
を展開する。

「遊戯」

デュエルが開始される直前、海馬くんはボクにだけ聞こえるよう呟
いた。

「俺が奴とデュエルをしている間、何とかしてモクバ達と連絡を取れ。

通信が安定次第、貴様はこの次元から離脱しろ」

「離脱……？ ボクは構わないけど、海馬くんはいいの？」

「要らぬ心配だ。この俺が奴如きに負けるはずがない。」

……問題はその後だ。奴は次元戦争とやりに備えて戦力を蓄えて
いる。ならば、勝敗に拘らず俺達を逃がさないよう細工している可能
性がある。

俺のデュエルディスクは貴様の子機。親機の貴様が帰らない限り、
俺もまた帰れない。だが貴様さえ逃げられれば、俺はその足跡を追っ
て脱出できる。

いいな？ 任せたぞ」

こちらの返事を聞く前に、海馬くんはデュエルのポジションに着い

た。

……状況はボクが思っているよりもずっと悪いのかもしれない。

あの海馬瀬人が身内以外の人間に背中を“任せた”のだ。彼からすれば、赤馬零児はそれほど信用ならない人間らしい。

……じゃあ、それに応えないと。

こちらからできることは限られてるけど、努力はするべきだ。

——両者の準備が整った瞬間、戦いの緊張感がフィールドを支配する。

一切の遊びがない空間。それは文字通り決闘。攻撃力すら感じられる海馬くんの威圧感を、赤馬零児は涼しい顔で受け流す。

「形式は「対」のアクションデュエル。」

いい機会だ。スタンダード次元ならではのデュエルを思う存分堪能してもらおう」

「いいだろう。ここが貴様らの世界だと言うのなら、この俺が土足で踏み込んでやる！ 行くぞ！」

「——デュエル！」